



2014年度春季特別展

大学博物館共同企画Ⅳ

# Sea Route

# 海路

海港都市の発展と  
キリスト教受容のかたち

Development of seaport town and  
Form of accepting Christianity



西南学院大学博物館

〒西南学院大学

# 主 催 者

本特別展「海路－海港都市の発展とキリスト教受容のかたち－」は、海を渡って日本に入ってきた思想や文化によって、日本がどのような影響を受けてきたのかについて迫ったものです。島国日本、特に港町においてどのような地域性があり、独自の文化を形成していったのか、そこに“祈り”がどのような“かたち”として反映されたのかについて取り上げました。

“海路”を通じて文物ばかりではなく思想なども日本にもたらされました。特にキリスト教の伝来や受容は宗教の訪ればかりではなく、文化的昇華を創出しました。本展覧会では、宗教としてキリスト教をとらえるのではなく、「海路」という視点から、西欧に限らず、海外交流によって各地に持ち込まれ、受容していた“かたち”を、幅広く紹介しております。

本特別展は、普段展示していない大学博物館の収蔵品を中心に構成しています。そして、西南学院大学博物館と梅光学院大学博物館、神戸大学海事博物館の3大学博物館が共同企画した展覧会です。また、地域博物館や自治体からの協力も得て、充実した内容の展覧会となりました。巡回する各会場で多くの方々に見学していただく機会になればと考えています。“社会に開かれた大学の窓口”である大学博物館による新しい社会貢献のあり方を提供できれば幸甚です。

本特別展開催にあたって、船の科学館・海と船の博物館ネットワークから支援を賜りました。末筆ではございますが、ご協力賜りました関係各位に対しまして衷心より御礼申し上げます。

西南学院大学博物館

館長

宮崎克則

梅光学院大学博物館

館長

渡辺一雄

神戸大学海事博物館

館長

矢野吉治

## ごあいさつ

本特別展は、2011年からシリーズとして続けている他大学博物館との共同企画の第4回目となります。初めて、本大学博物館をふくめ3つの大学博物館とその他の機関から協力を得て開催される展覧会です。年を経るごとに協力いただく機関・大学博物館も増え、本博物館の取り組みが浸透しているように感じております。

本特別展「海路－海港都市の発展とキリスト教受容のかたち－」では、海を渡って日本に入ってきた思想や文化によって、日本がどのような影響を受けてきたのかについて紹介しています。島国日本がどのような歩みをしてきたのか、歴史的に迫る内容となっています。

そのひとつとしてキリスト教の伝来があります。キリスト教は本学の建学の精神でもあり、過去の特別展でも日本におけるキリスト教の伝来や受容について取り上げてきました。また「海路」という視点や、西欧に限らず、海外交流によってそのほかの地域から持ち込まれたものなど、幅広くご紹介しております。本特別展の特徴としては、初めて展示する本博物館の収蔵品があること、そして複数の大学博物館を会場に巡回することです。各会場で多くの方々に見学していただく機会を提供しています。

本特別展開催にあたって、船の科学館・海と船の博物館ネットワークから支援を賜りました。末筆ではございますが、ご協力賜りました関係各位に対しまして衷心より御礼申し上げます。

2014年6月16日

主催者代表校 西南学院大学博物館

館長 宍崎克則



## 開催趣旨

大航海時代の訪れは、日本に新局面をもたらした。それは新しい文化的萌芽としてあらわれ、特に鉄砲とキリスト教伝来は、島国日本がダイナミックな世界史の舞台にたった瞬間ともいえる。こうした新しい文物や思想は、日本にも浸透、そして定着していき、各地で一様ではない地域性のある“かたち”で受け入れられていった。

海で囲まれた日本にとって、海路は重要なツールであり、物流の発展は人的交流も促進することになった。特に西日本においては、瀬戸内海を主要な航路とし、関門海峡を経て九州に入り、そして玄界灘から長崎に至る海路は定型のものとして定着していた。

その中継地や海外交流の拠点となっていた地域には、経済的発展がもたらされたとともに、特色ある地域性・文化圏を形成していた。他方、九州各地が南蛮船を受け入れていたこと、そして江戸時代の鎖国(海禁)政策のなかで長崎が貿易都市に位置付けられたことによって、西日本には舶来品が数多く行き交っていた。その姿が南蛮文化、そして紅毛文化として表出したのである。

四方を海で囲まれた日本にとって、海路の発展と充実は、必要不可欠であった。そこで、本特別展は、“海路”をキーワードとし、西日本域に定着した共通の思想的テーマであるキリスト教文化の特色、そして海外交流の姿から、日本人に育まれてきたあらゆる“かたち”について紹介していくことにする。

| 会 期 | 福岡会場：西南学院大学博物館 2014年6月16日(月)～8月30日(土)  
山口会場：梅光学院大学博物館 2014年9月4日(木)～10月18日(土)  
兵庫会場：神戸大学海事博物館 2014年11月8日(土)～12月19日(金)



# 目次

## 主催者・ごあいさつ

西南学院大学博物館 館長	宮崎 克則	
梅光学院大学博物館 館長	渡辺 一雄	
神戸大学海事博物館 館長	矢野 吉治	2

開催趣旨	4
------	---

目次・凡例	5
-------	---

## 本編

I. 描かれた海の路	6
II. キリスト教史の展開	18
III. 祈りのかたち	32
IV. 海外交流の諸相	41

## 寄稿 「貿易陶磁器」

福岡市埋蔵文化財調査課 文化財主事	中尾 祐太	48
-------------------	-------	----

## 論考 「キリシタン資料の真偽性」

西南学院大学博物館 学芸員	安高 啓明	50
---------------	-------	----

「神戸市立博物館所蔵《聖フランシスコ・ザビエル像》についての一考察  
—— 反映されたイエズス会の布教美術政策 ——」

西南学院大学博物館 学芸研究員	内島美奈子	53
-----------------	-------	----

「連携の効果と課題 —継続性を求めて」

西南学院大学博物館 学芸員	安高 啓明	57
---------------	-------	----

出品目録	61
------	----

## 凡例

◎本図録は西南学院大学博物館開館春季特別展「海路—海港都市の発展とキリスト教受容のかたち—」[会期 会場：西南学院大学博物館2014年6月16日(月)～8月30日(土)、会場：梅光学院大学博物館9月4日(木)～10月18日(土)、会場：神戸大学海事博物館11月8日(土)～12月19日(金)]開催にあたり、作成したものである。

◎図版番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。

◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することは認めない。

◎本図録の資料解説および編集は安高啓明(本学博物館学芸員)、内島美奈子(本学博物館学芸研究員)がおこない、資料解説には中尾祐太(福岡市 経済観光文化局文化財部 埋蔵文化財調査課調査第1係文化財主事)も加わった。英文翻訳ならびに編集補助には、山尾彩香(本学博物館学芸調査員・本学大学院国際文化研究科博士前期課程)、出口智佳子(同上)、下園知弥(同上)、阿部大地(同上・本学大学院国際文化学部生)があたった。なお、翻訳についてはマルセル・プリス氏(ボフム大学)のご協力を得た。

# I

## 描かれた海の路

Drawn sea routes

時代を問わず物流を支えていたのは船舶であり、海路は重要な交通手段として整備されてきた。自然環境・気象条件によって、乗組員の生命が危険にさらされるため、船の改良はもとより、航路図がつくられた。航路や島間の距離など、詳細に記しているさまは、まさに危険と隣り合わせていた当時の人々の心境、さらには航海技術の進展を物語っている。



In all ages, goods have been distributed by ships, so that the sea route became an important way of transportation. Due to the exposure of the crew's lives to the natural environment and its risks, the technique of ships was constantly enhanced and sea maps were drawn. These maps, precisely described the distance between islands and displayed sea routes, can be considered as a testimony of the people's intention to reduce hazards for maritime traffic. Furthermore, these sources impart information regarding the life of those Japanese living with the sea.







## 1. 山田長政軍船図

### Picture of Yamada Nagamasa's warship

19世紀  
神戸大学海事博物館

山田長政は東南アジアに日本人町をつくった人物として知られ、1612(慶長17)年に朱印船でシャムに渡っている。シャムに日本人町をつくり、郊外のアユタヤで日本人町の頭領となり、軍功を挙げている。この資料は1626(寛永3)年に浅間神社(静岡)に奉納された絵馬の写である。なお、絵馬は1788(天明8)年に浅間神社が被災したことで失われているが、勇猛にすすむ山田長政の軍船をよく描いた当時の絵馬を彷彿とさせる。なお、絵馬には、願掛けとともに寄進者である山田長政の説明もなされている。







## 2. 海路図屏風(左隻)

### Figure Screen of sea route map

18世紀  
神戸大学海事博物館

大坂から長崎までの航路を描いたもので、元禄頃の西日本一帯の様子をあらわした六曲一双である。左隻には九州北部(長崎・佐賀・福岡・大分・宮崎)が描かれ、特に長崎の描写に詳しい。その構図からも長崎に居住していたか、長崎の地理に精通していたものによる描かれ方である。また、福岡城や小倉城、久留米城、柳川城、秋月城、佐賀城、唐津城、大村城、島原城、熊本城、八代城、富岡城、木付(杵築)城、日出城、府内城といった、主要な城郭をおさえていることも特徴といえる。

※西南学院大学博物館・神戸大学海事博物館でのみ展示。





長崎部分



福岡部分





広島・厳島部分



大坂部分

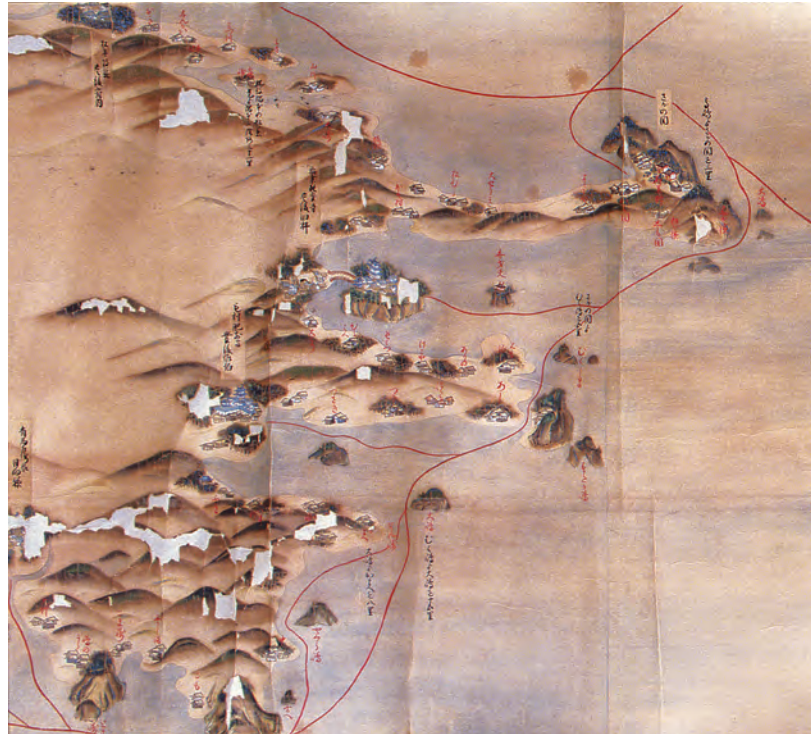




### 海路図屏風(右隻)

右隻には、安芸国境から四国、大坂までが描かれている。瀬戸内海沿岸の主要な城郭、中国地方では広島城・福山城・岡山城・姫路城・明石城・尼崎城、四国は松山城・丸亀城・高松城・徳島城・高知城を描いている。このほか、社寺も描いたり、大坂では淀川筋の架橋(難波橋・天神橋・天満橋)まで記されている。海路図という性格を超えた芸術性のあるものとして作成されている。









### 3. 海路絵図巻(複製)

*Picture scroll of Sea route map (replica)*

18世紀  
神戸大学海事博物館

文物の運搬ルートである海路は、当時の経済圏を構成していた。季節風や親潮・黒潮の海流で航路が変更となることもあったため、海路図の作成は重要だった。本資料も海路図のひとつであるが、山海城郭含めて写実性に富んで描かれている。堺から九州、南海を取っており、実際に航海でつかわれたというよりは、記録用として絵師により作成されたものと推察される。





#### 4. 西国海上之図

##### *Picture of Saigoku sea*

19世紀  
神戸大学海事博物館

大坂から中国・四国、肥前、肥後、豊後、薩摩国といった九州各国の距離を記し、最後に江戸を取り上げ、「江戸へ舟路貳百貳拾六里」とある。また、潮目がかわるところとして、備中の白石、筑前の山家郷崎、肥前川崎などが挙げられているところが、一般的な航路図としては珍しい。距離を文字でおとしながら、瀬戸内海の島々や北部九州までを描いている。また、長崎から南京、福州、ルソンなど中国大陸との距離を記すなど、海外航路も視野に入れられて作成されている。







## 5. 従大坂至唐津海路図

### *Sea route map to Osaka*

18世紀

神戸大学海事博物館

唐津から大坂までの航海に必要な情報を記したもの。唐津城や小倉城、三原城、丸亀城、姫路城、尼崎城など、九州から中国、四国、近畿地方の主要な城郭を描いている。なお、大坂城に至っては「御城」とある。海路を目的として作成されたものであり、各地域間の直線距離を記載するなど、航海図の要素を満たしている。





## 6. 望遠鏡(森仁左衛門作製)

*Telescope (made by Mori Jinzaemon)*

1720年頃  
神戸大学海事博物館

望遠鏡(遠眼鏡)は1608年にオランダで発明されたといわれる。日本にはイギリス人が徳川家康に献上した1613(慶長18)年にもたらされている。これ以降、長崎貿易を通じてオランダから輸入していたが、軍用として各地の領主も求めるようになった。各地に伝わった望遠鏡は国産化されるようになり、本資料もそのひとつである。金色の牡丹に唐草文をほどこしたこの望遠鏡は、長崎に住む森仁左衛門正勝により作られたものである。森仁左衛門は享保年間に活躍した人物で、徳川吉宗にも献上するほどの腕前だった。海外からもたらされた舶来品が日本の職人の手によって国産化し、その技術・精度も従来のものよりさらに向上するようになった。



## 7. 磁石

*Magnetic compass*

20世紀  
神戸大学海事博物館

磁石とは磁気によるコンパス・羅針盤の俗称で、航海用としては少なくとも中世後期には使われだしたといわれる(方位磁石)。近世では一般的に普及し、方角を認識するための道具として船頭たちが利用していた。そもそも方位磁石は船上での利用には不向きであった。それは、風波による揺れのためであり、これに改良を加えられていった。この資料は方角を十二支で表現しており、「子=北、卯=東、午=南、酉=西」とし、これをさらに等分した十二方位である。



# II

## キリスト教史の展開

### The Development of Christian history

船舶は文物の流通ばかりでなく、思想、宗教ももたらした。1549年に来航したフランシスコ・ザビエルは鹿児島に上陸したのち、京都上洛を果たしているが、彼が伝えたキリスト教は各地で着実に受け入れられ、信仰とともに南蛮文化を創出した。海禁政策により海路が閉ざされた日本であったが、一度萌芽した文化は連綿と引きつがれており、新たに紅毛文化として“かたち”を変えながら定着していくことになった。



Vessels transported not only cultural relics, but also thought and religion. In 1549, Francisco Xavier landed in Kagoshima, went to Hirado in Nagasaki and then traveled to Kyoto through Fukuoka and Yamaguchi. Xavier reportedly established Christianity and Western Civilisation in various places. Despite the Kaikin-Policy that resulted in the closure of the sea route to Japan, once planted, the culture while being transformed to the Kōmō-Culture, prevailed and spread.





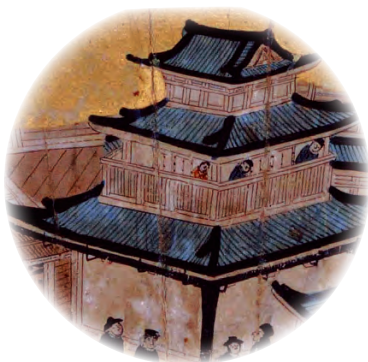
## 8. フランシスコ・ザビエル像(複製)

### *Portrait of St. Francisco Xavier (replica)*

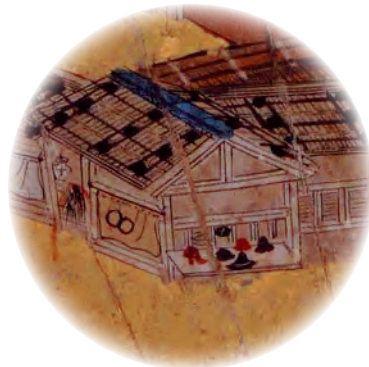
17世紀

神戸市立博物館(原品は国指定重要文化財)

イエズス会から西洋画の手ほどきを受けた絵師が、銅版画を手本にして描いたもの。ザビエルが列聖した1622(元和8)年より後に礼拝画として制作されたと推定される。両手を胸の前で交差させ、右手には燃え上がる心臓、十字架(磔刑のキリスト)を抱いている。ザビエルの視線は右上の天に舞う複数の智天使(ケルビム)に向かっている。ザビエルの口元には「SATIS EST DOMINE SATIS IST」(十分です。主よ、十分です)と記されている。交差する両手は祈り、燃え上がる心臓は神への愛を示しているといわれる。ザビエルは1549(天文18)年に鹿児島に上陸後、平戸、京都、山口、大分などをまわり、1551(天文20)年に日本を去っている。なお原品は、神戸市立博物館で所蔵され、国指定重要文化財となっている。



南蛮寺



南蛮帽子を売る店



修道士

## 9. 都の南蛮寺

### *Picture of Namban temple*

桃山時代(16世紀後半)  
神戸市立博物館

狩野宗秀(1551～1601)の作品で、南蛮寺を中心に配し京都の町並を描いたものである。イエズス会が京都へ向かい、そこで布教の拠点とした四条坊門姥柳町に建立した3階建ての聖堂を描いている。高山右近の父である凶書の支援を受けて、1576(天正4)年には献堂式がおこなわれ、これは「被昇天の聖母教会」と呼ばれた。1587年(天正15)年の伴天連追放令を以って破却されるが、それまで教会を中心とした南蛮文化が京都に色づいていた。それをあらわすように門前には南蛮帽子を売る店も描かれている。





## 10. メダイ鋳型

### *Mold of medal*

16～17世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

メダイと十字架の鋳型も博多遺跡群で出土している。博多でメダイと十字架が製造されていたことを示すものであり、外国からもたらされた信仰物が国産化されるようになった実相がわかる。なお、欠損しているものの楕円形のメダイであったことが推測される。



## 11. メダイ

### *Medal*

16～17世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

博多遺跡群で出土したメダイで、左は表裏にイエス・キリストと聖母マリアが鋳込まれている。そして、右のなすび型のメダイは、2例が博多で発掘されている。なすび型のメダイは府内で多くの発掘成果が挙げられており、その分布範囲がこの資料からも示される。



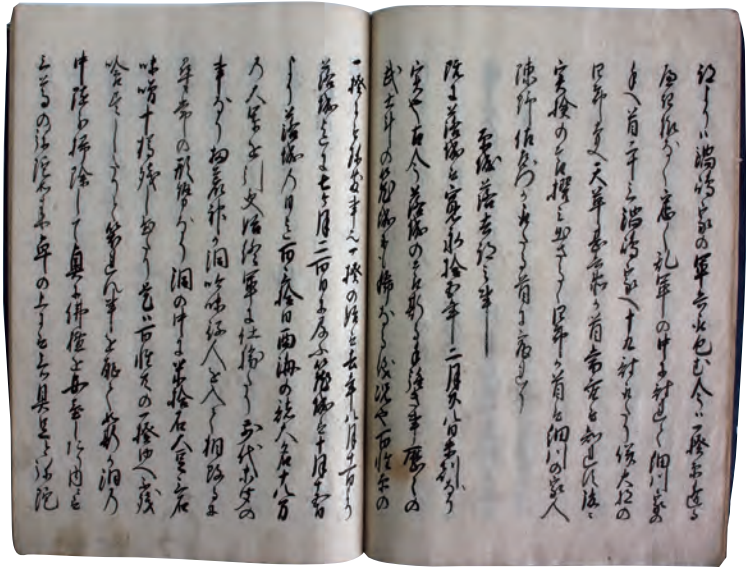
## 12. 天草四郎

### *Ukiyo-e of Amakusa shiro*

1874(明治7)年  
西南学院大学博物館

島原・天草一揆の首領の益田四郎時貞は、小西行長の旧臣で浪人の益田甚兵衛好次を父にもつ。いつキリシタンになったのかについては不明であるものの、洗礼名はジェロニモとされる。資料によると四郎は、美形であり才気煥発、医術を心得えており、武術にも長けている。色々な奇蹟をおこなった、教義にも精通した人物として紹介されている。本資料は月岡芳年に作製された天草四郎の版画であるが、甲冑を身に付けた勇猛な姿で描かれている。天草四郎に関するこうした版画がつくられていることは、1873(明治6)年のキリシタン制札撤去にともなう禁教解禁を象徴するものともいえよう。





### 13. 天草軍記

*Amakusagunki (Records of Amakusa-Shimabara rebellion)*

19世紀  
西南学院大学博物館

島原・天草一揆は原城に籠城したキリシタンたちが幕府軍に抵抗したものととして後世にも伝えられた。キリシタン禁制が強まっていくなかで、歌舞伎や浄瑠璃などで一揆を題材に取り上げることも禁止された。しかし、当時の状況を伝えるものは体制側の視点で数多く作成されており、本資料もそのひとつである。天草一揆の発生状況に始まり、キリシタン禁制の内容、一揆の総大将天草四郎時貞について、原城総攻撃、最後に寺沢氏や松倉氏が一揆の責任をとるところまで収められている。天草四郎については「拾七歳なり 生質利発」と書き記している。



### 14. キリシタン制札

*Proclamation banning Christianity*

1682(天和2)年  
西南学院大学博物館

江戸幕府は厳しい禁教政策を断行したなかで、人民による相互監視も同時におこなっていた。五人組もそのひとつであるが、広く周知させるのに効果的だったのがキリシタン訴人制札である。伴天連の訴人は銀500枚、イルマンの訴人は銀300枚、立帰者の訴人は300枚、同宿・宗門の訴人は100枚を与えられた。全国的にこの制札は掲げられたが、ここで記された報賞額は時代によって変化している。訴人褒賞制は1626(寛永3)年にはじまったもので、長崎市中では囑託銀を掲げて訴人を促していた。

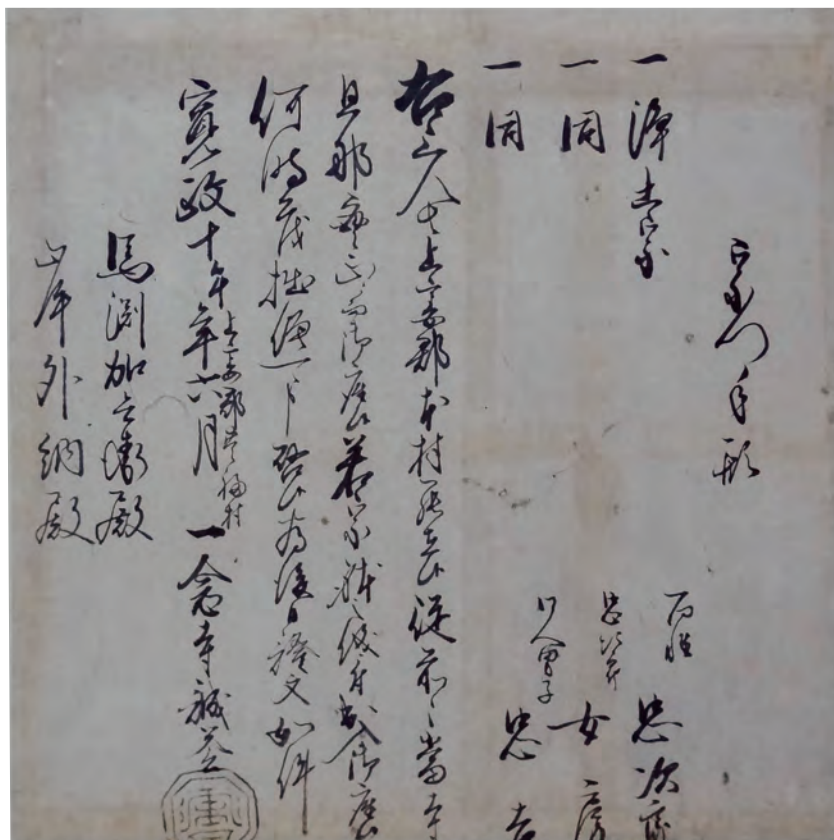


### 15. 宗門改影踏帳

*Documents with history of the ban on Christianity*

1852(嘉永5)年  
西南学院大学博物館

本資料は鳴原藩武家の宗門人別改帳である。鳴原藩は長崎奉行所から踏絵を借用して絵踏していた藩のひとつで、絵踏のことを「影踏」と称していた。これが本資料名に由来し、鳴原藩では人別改を絵踏と一緒に進めていた。「宗門人別改帳」に記載されることによって、住民がキリシタンではないことを証明することになった。檀那寺と檀家が押印するが、地域によっては爪印が押されることがあった。本資料をみると、戸主以外の妻・男子・女子には筆軸印が押されていることがわかる。



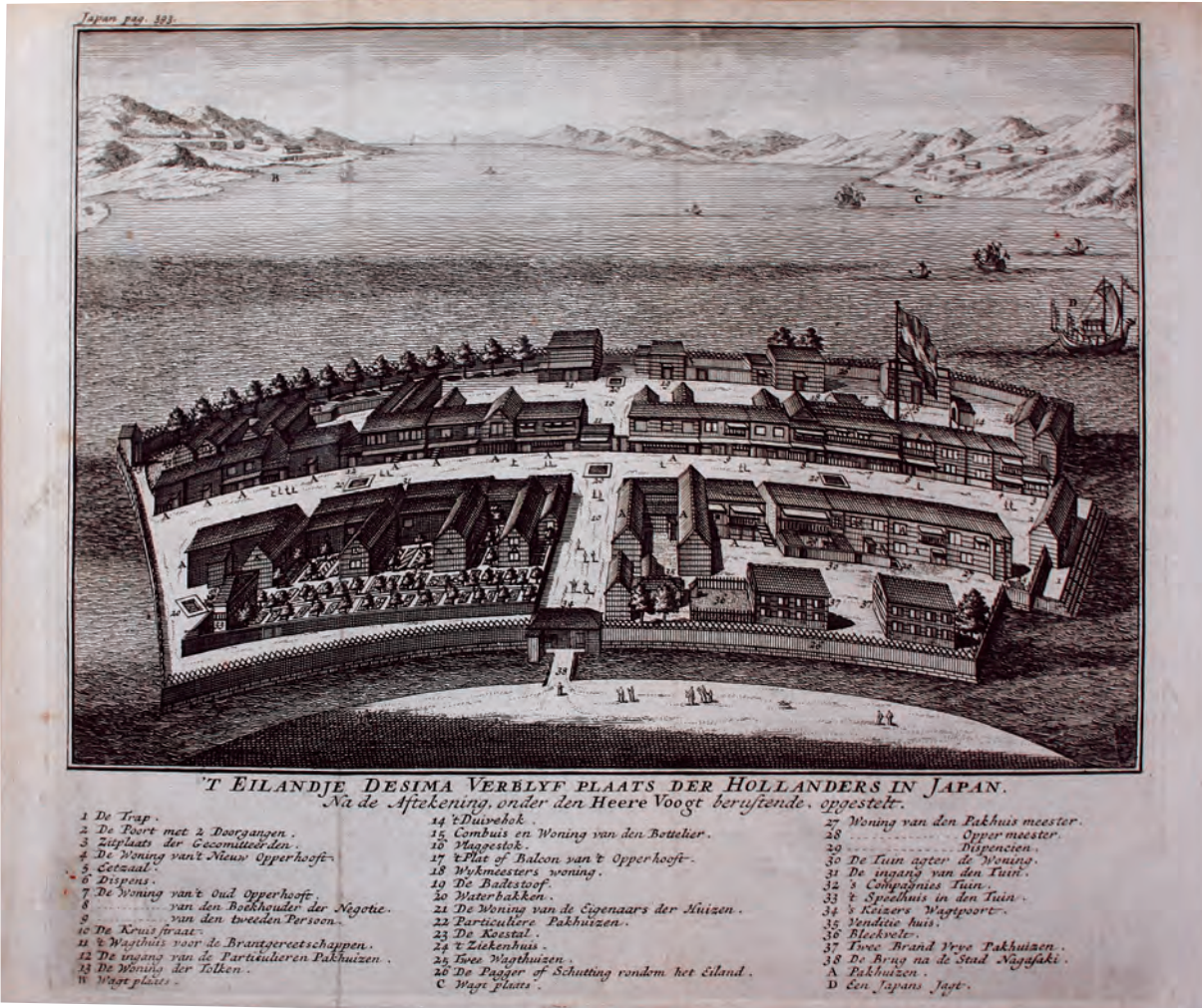
### 16. 筑後国宗門手形

*Religious census certificates of Chikugo Province*

1798(寛政10)年  
西南学院大学博物館

筑後国上妻郡本村(現在の八女郡広川町)に住む忠次郎と女房、息子の忠告は、浄土宗一念寺が檀那寺であることを証明したものの、もし、二人の宗旨で疑わしいことがあったならば、連絡するようにと触れている。江戸幕府は宗門改と寺請制度を確立したが、キリシタンはもとより、日蓮宗不受不施派なども認めなかったことから、信仰の如何を証明する必要があった。檀那寺は宗門改をした結果、檀家に対して寺請証文を発給するが、これを寺請状や寺送状、宗門手形などとも呼んでいた。本資料から、筑後国では宗門手形と称しており、僧侶が発給していたことがわかる。これは奉公や結婚、引越の際には檀那寺から転居先の寺院に送られるなど重要な文書として取り扱われた。





## 17. 出島図

### Map of Dejima

1735(享保20)年  
西南学院大学博物館

出島は禁教政策を象徴するものであり、元来、ポルトガル人を収容するために、1636(寛永13)年、出島商人25名が出資して中島川下流につくられた。1641(寛永18)年、オランダ商館はポルトガル人追放後に空き地となっていた出島に平戸から移転された。オランダ人は出島での滞留を条件に貿易を許され、制限された空間のなかで生活した。出島を外出できる日や出入りできる日本人も限られており、当時のオランダ人たちは出島のことを「監獄」とも表現している。本資料はティリオンが刊行した地図で、1735(享保20)年頃の出島を描いたものである。



## 18. 紅毛人プラケット

*Small wall hanging of Dutch made of lacquer*

18～19世紀  
西南学院大学博物館

西洋の小型壁掛けを「プラケット」というが、蒔絵技術による描写は18世紀後半に西洋で流行し、出島オランダ商館を通じて日本にもたらされた。本資料は狎をひいたオランダ人をモチーフとしたもので、裏面には長崎八景のひとつ「神崎帰帆」が描かれている。西洋の技術が日本人職人の手によって国産化されたもので、長崎土産のひとつとして作製されたのであろう。日本は禁教政策による鎖国(海禁)体制がとられたものの、西洋の文化・文物・技術などを積極的に受容していたことがわかる。





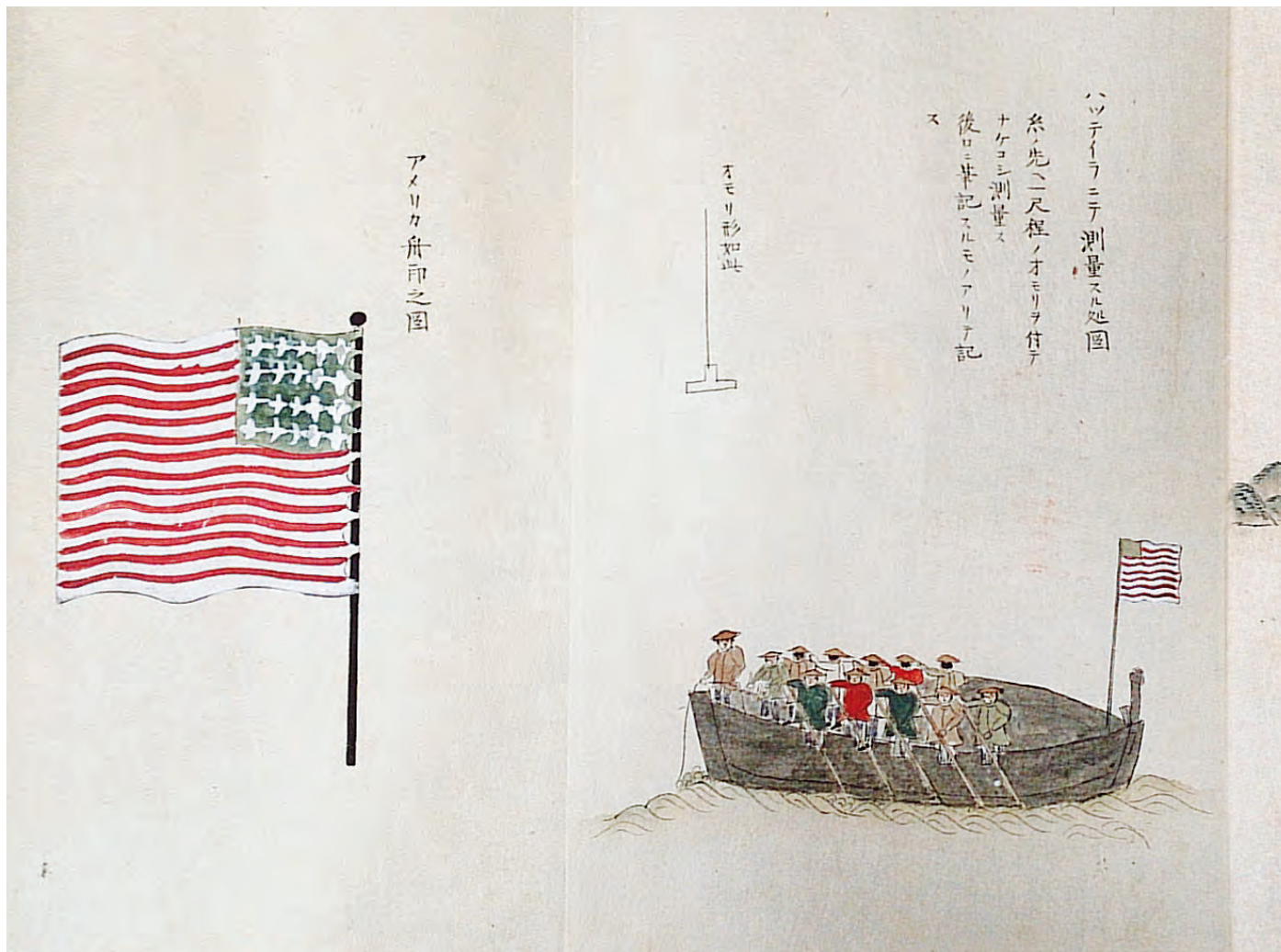
## 19. 紅毛人遠見之図

### *Picture of Dutch*

19世紀

西南学院大学博物館

長崎版画や長崎絵とも呼ばれる本資料は、18世紀中頃から明治初期にかけて作成された浮世絵様式である。長崎版画は海禁下にある長崎を象徴するオランダ人や唐人を題材とすることが多く、彼らが生活している様子や立ち姿、外国船などを描くことが多かった。なかには、ロシア人や韃靼人(モンゴル系)などを描いたものもある。本資料は召使いを同伴して、長崎港を出航するオランダ船を背景にとらえた構図である。去り行くオランダ船を遠くに眺めるオランダ人からは哀愁も感じられ、連れている犬がさらなる情趣を引き出している。長崎版画からは、当時の外国人の服装、風俗などを知ることができる、いわゆる“長崎土産”として非常に人気があった。



## 20. 米利幹事略

### *Records written concerning events with America*

19世紀  
西南学院大学博物館

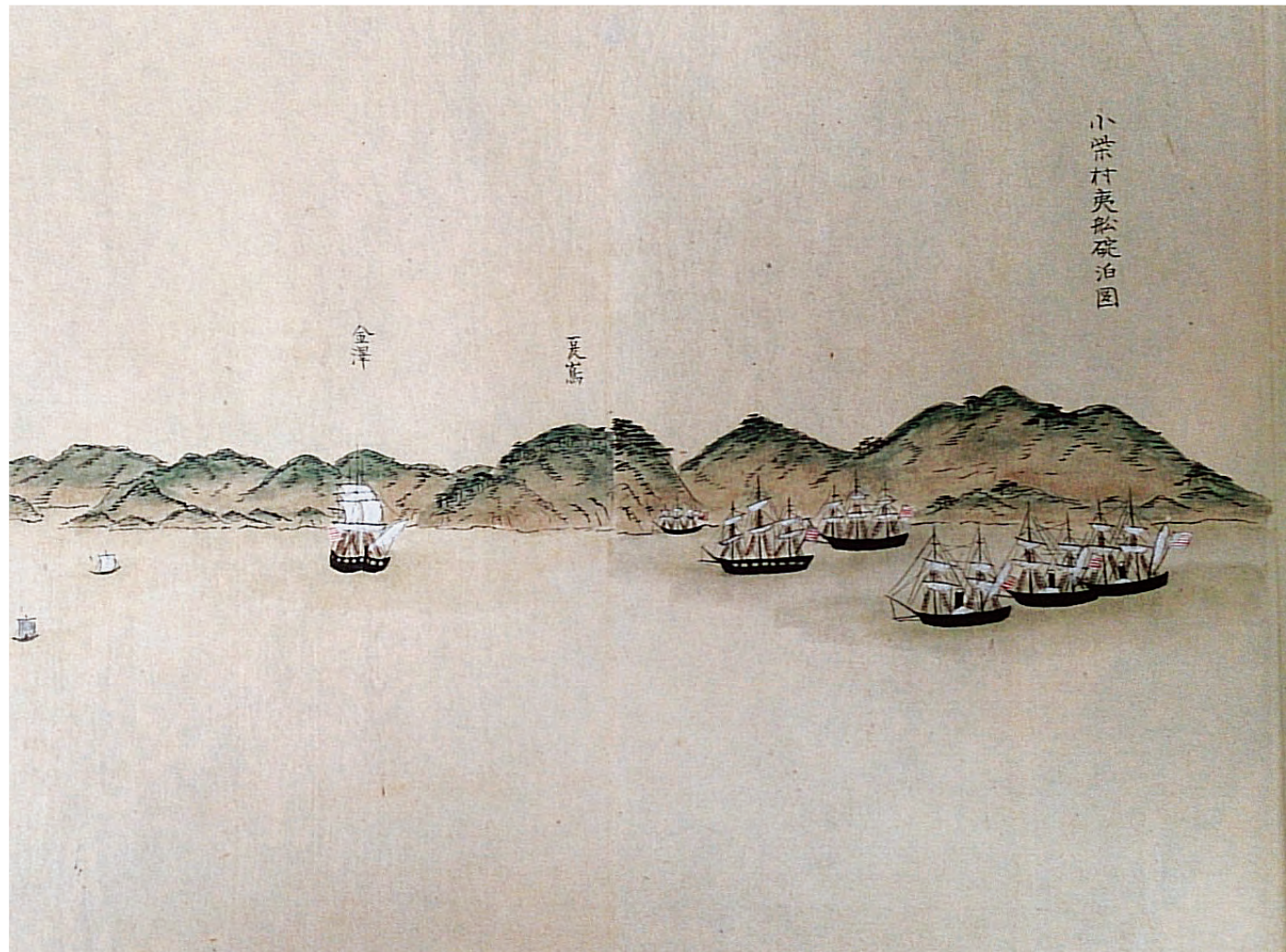
1853(嘉永6)年、マシュー・ペリー率いるアメリカ東インド艦隊が浦賀に来航する。ここでフィルモア大統領の親書を手渡し、翌年の再来航を通達して、一端、香港に戻った。翌年、ペリー艦隊は当初予測されていた浦賀沖ではなく、小柴村に軍艦7隻を率いてあらわれて停泊している。この資料は、その時の様子を絵入りで描き、その後、浦賀での交渉場面も記している。バツテイラに乗って測量している様子やアメリカ国旗も描かれている。なお、「浦賀日記」として代官江川太郎左衛門からの報告書も収められ当時の緊迫した国内事情を知ることができる。



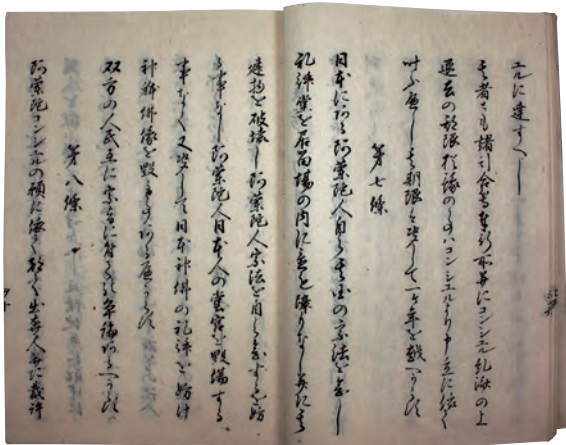
小柴村夷船碇泊図

金洋

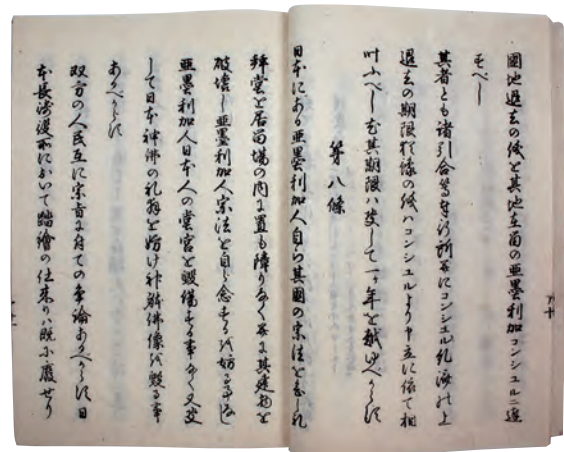
長島



小柴村に停泊する軍艦



日蘭修好通商条約



日米修好通商条約

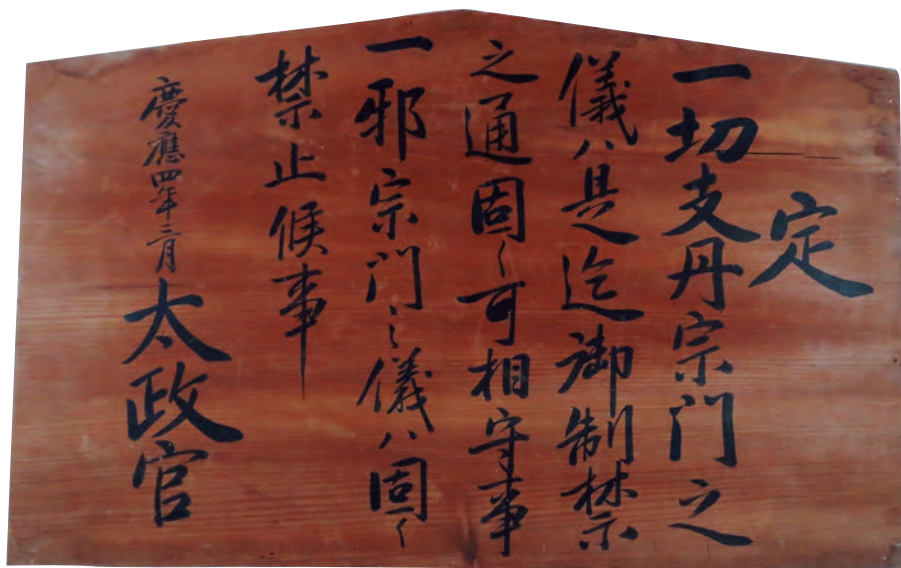
## 21. 安政五ヶ国条約(写)

*The United States-Japan Treaty of Amity and Commerce (copy)*

19世紀

西南学院大学博物館

1858(安政5)年、日本はアメリカ・イギリス・フランス・ロシア・オランダと修好通商条約を締結する。これを安政五ヶ国条約と総称するが、その内容は日本にとって不平等なものだった。アメリカとは最初に締結したが、その内容は片務的最恵国待遇のもと領事の駐在や函館・神奈川(横浜)・長崎・兵庫(神戸)を開港し、江戸と大坂を開市とすること。そして、自由貿易を認め、関税自主権を喪失する事態となった。さらに、領事裁判権のない治外法権を許認、そして外国人遊歩規定も組み込まれた。ここでは日本の宗教政策についても言及されており、アメリカは長崎での「踏絵」中止を求め、認めさせている。オランダとは居留地内での礼拝堂建立を許可されるなど、修好通商条約の締結によって、宗教政策も見直す段階に入ってきたのであった。



## 22. キリシタン制札

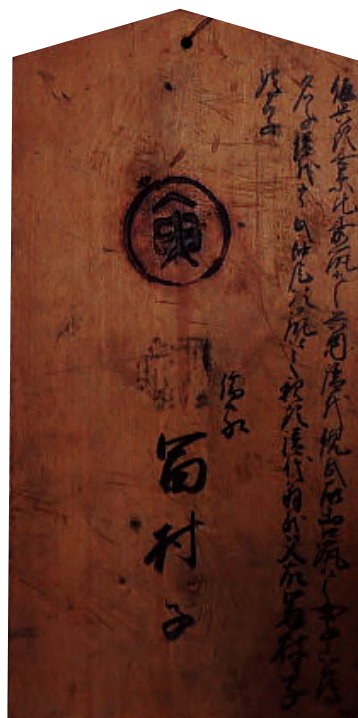
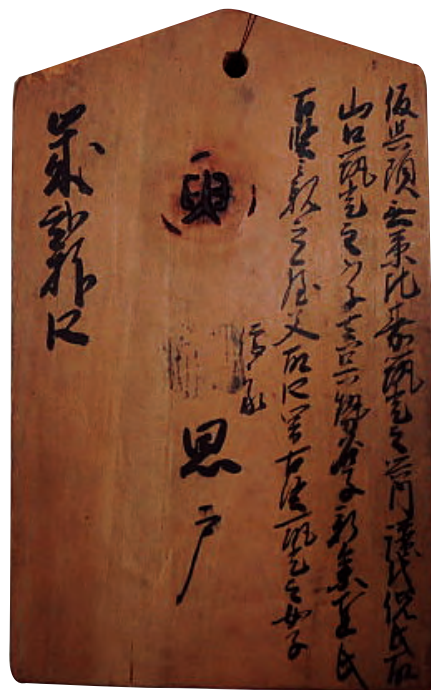
*Proclamation banning Christianity*

1868(慶応4)年

西南学院大学博物館[芦沼完治氏(長野県)・芦沼康久氏(東京都)旧蔵]

安政五ヶ国条約が締結されてからも日本国内では禁教政策は維持されていた。これは倒幕し明治新政府が樹立されても引き継がれることになった。本資料はキリシタン禁制を掲げた太政官札で、いわゆる五榜の掲示のひとつである。対外的な圧力によって踏絵の禁止や礼拝堂の建立を認めざるをえなかったものの、日本人に対しては引き続き禁教という国是は掲げられたままとっていた。これが許されるようになったのは、1873(明治6)年2月にキリシタン制札が撤去が決定されてからだった。





## 23. 宗門鑑札

### Religious sect license

1866(慶応2)年  
梅光学院大学博物館

禁教下には寺請制度や宗門改の実施、九州域では絵踏がおこなわれるなど、徹底したキリシタン弾圧が展開されていた。キリシタンではないことを証明するために、宗門請状などが発給されていたが、琉球では宗門鑑札が作製され、これを身に付けることを義務付けられていた。本資料は1866(慶応2)年の宗門鑑札で、那覇内泉崎村の者たちに持たせたものである。発給者として、表面に「里主小禄親雲上」・「御物城安良城親雲上」の名があり、裏面には両人の名前とともに、儒宗であることが記され、焼印もみられる。



# III

## 祈りのかたち

Form of prayers

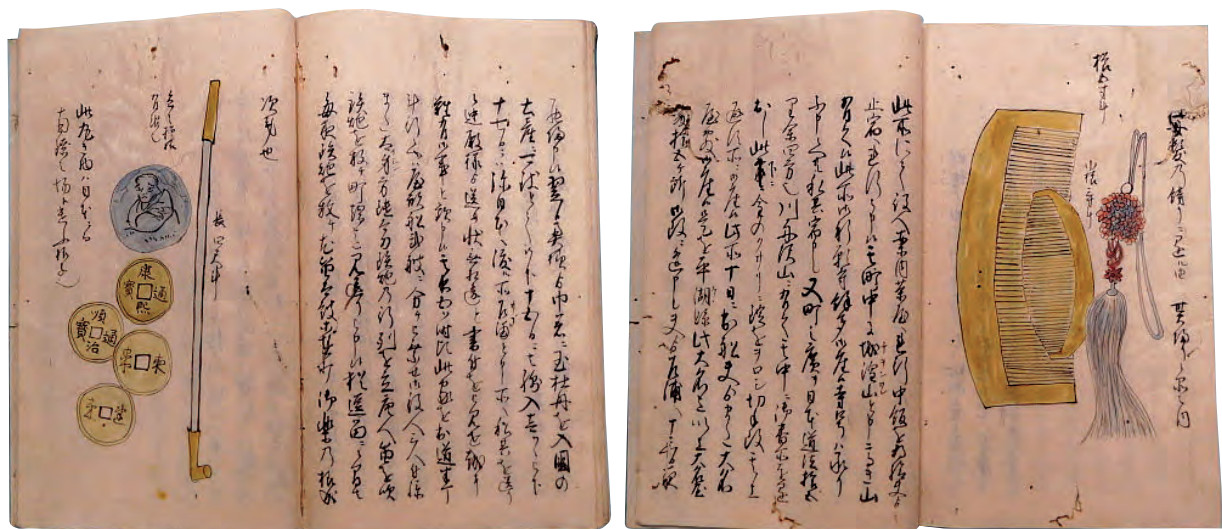
海に関わる人々には常に生命の危険と隣り合わせであった。暴風による難破、そして漂流という、いつ我が身に降りかかるかもしれないなかで、航海の安全を絵馬として社寺に祈願するものがあった。また、南蛮船が行き交った時代の豊かさを求めて奉納するものもいたり、祈りのかたちは様々だった。これらの資料は、当時の日本人の信仰形態をまさに具現化しているのである。



People who traveled the seas, were in constant danger of risking their lives. In order to avoid getting shipwrecked or drifting and to guarantee the safety of the voyage, sailors put their faith in a votive tablet that had been blessed at a shrine or temple. There existed many different forms of prayers. In times when western ships came and went, the votive tablets were blessed for those who sought prosperity. These exhibits represent the forms of Japanese faith during that time.





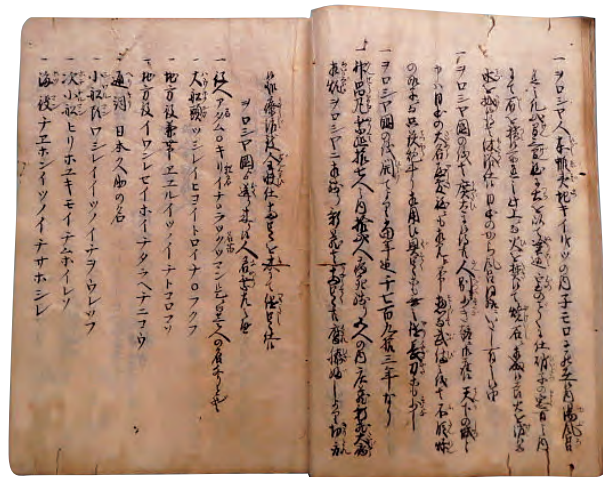


## 24. 唐国漂流物語

### The story of drift to China

19世紀  
神戸大学海事博物館

1826(文政9)年、10人の乗組員の宝万丸は、松前福山や蝦夷地で昆布などを運搬していたところ、9月7日頃、次第に天候が崩れてきて破船し、唐国へ漂流した。彼らは南京に逗留し蘇州を訪れて、各所を見聞している。そして12月1日に長崎へ向かう唐船に乗船し、1月3日に長崎に到着すると、彼らは長崎奉行所に召し出され、慣例の通り揚屋に入れられた顛末を記している。揚屋という牢屋の一種に入れられたのは、キリシタン容疑があったため、漂流民は等しく同様の手段をとっていた。なお、日本へ送り届けた唐船には御礼として玄米80俵が与えられている。

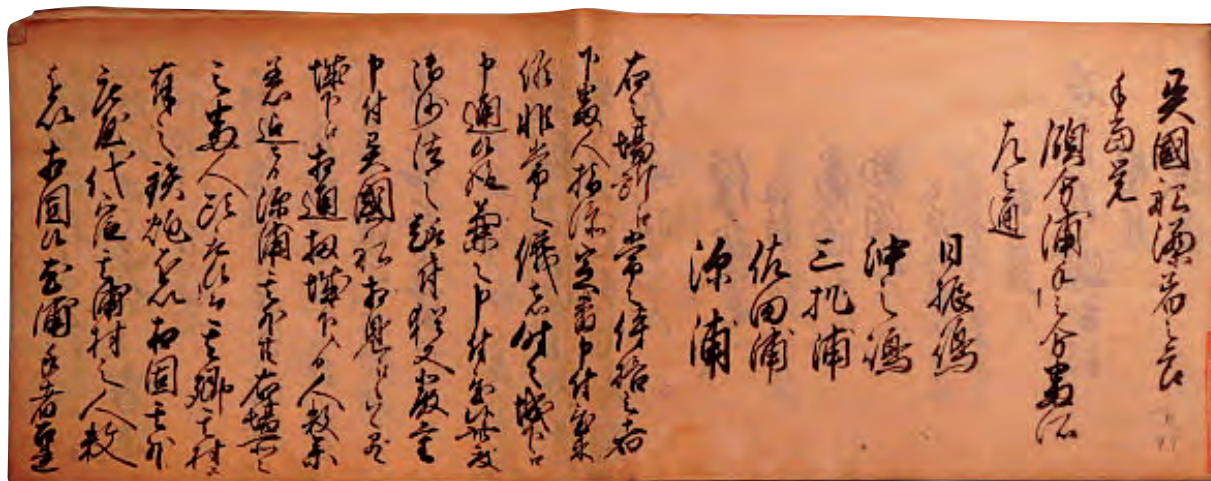


## 25. 漂流八ヶ条

### *Eight treaties about drift*

19世紀  
神戸大学海事博物館

本資料は「魯西亜国漂流」「無人島漂流」「韃靼より北京へ漂流」「阿南国漂流」の四編を収める。いずれも日本人が漂流した事例であり、魯西亜国漂流は1782(天明2)年勢州白子村の二人がロシアへ漂着したこと、無人島漂流は1785(天明5)年、土佐国赤岡浦の磯七の船が無人島へ着き、さらに伊豆青ヶ島へ漂着したものである。韃靼より北京へ漂流は、越前国商船が破船し、韃靼に漂着、その後北京、朝鮮へ送られ、対馬国経由で身柄が引き渡されていることを記している。阿南国漂流は、1765(明和2)年に常州の船主・水主6名が漂着したことを収め、様々なケースの漂流を記録している。



## 26. 異国船漂流之節御手当之儀被仰出候御書付控

### *Rules about Drifter from China*

18世紀  
神戸大学海事博物館

伊予国で唐国が漂着したときの対応を定めたもの。隣国に注進(連絡)するときは城の矢倉から鐘や太鼓を鳴らして合図とすることなどが記されている。また、これにあたって人員配置も定められ、30人程連れた侍大将を1名、番頭2名、目付、使者、僧、医師まで記されている。なお、手当は江戸から支給されることになっていたことがわかる。





## 27. 絵馬(妙見丸)

### *Votive tablet of sailors (Myokenmaru)*

19世紀  
神戸大学海事博物館

船絵馬は船頭や水主が航海の安全を祈願して社寺に奉納するものである。鎖国体制確立以前は、海外渡航に先だって奉納されていることがおおく、それだけ航海は危険と隣り合わせだった。鎖国以後は船絵馬奉納も下火となっていき、18世紀半頃からは舟才船の船絵馬がみられるようになってくる。現存する船絵馬の9割がこれにあたり、大坂には専門の絵師も出現した。写実性にとんだ船絵馬も作成され、画家並みに落款をいれるものも現れた。彼らは船絵師という肩書きを使うようになり、これに追随するかのよう絵馬師も出現した。



## 28. 南蛮船絵馬

### *Votive tablet of Westerner's ship*

19世紀  
西南学院大学博物館

鎖国体制確立以前、南蛮船が日本に多くの文物をもたらした。ポルトガル船はマカオを、スペインはマニラを拠点に貿易を展開していた。1624年にスペイン船、次いで1639年にポルトガル船が日本への来航を禁じられると、オランダが貿易を独占することになる。しかし、南蛮船がもたらしていた華やかな時代は、後世にも伝えられるところとなり、本資料のような南蛮船を描いた絵馬が社寺に奉納されている。南蛮人行列奉納絵馬と同様に、蓄財を祈念したものになろうが、当時のきらびやかな時代は忘れ去られることなく、聞き伝えられていたことを示している。なお、本図は、宮内庁三の丸尚蔵館が所蔵する南蛮屏風の左隻部分を写したものである。





## 29. 南蛮人行列絵馬

### *Votive tablet of Westerner's parade*

19世紀  
西南学院大学博物館

ポルトガル人・スペイン人などを南蛮人というが、鎖国体制確立前、彼らをもたらした西洋の新しい文物は、南蛮文化として花開き、一世を風靡した。彼らが上陸して行列をなす姿は、狩野派をはじめとする絵師により描かれている。南蛮人は当時の人々に財をもたらす存在として認識されている。この南蛮人行列奉納絵馬も社寺に奉納されたものになるが、蓄財を祈念して描かれたものであろう。原図は現在、南蛮文化館が所蔵している南蛮屏風の右隻部分にあたる。



### 30. マリア観音像

#### *Small statue of Mary Kannon*

17世紀  
西南学院大学博物館

江戸幕府の禁教政策下において、潜伏キリシタンたちは慈母観音をマリアと同一視して信仰の対象としていた。擬似信仰のひとつであるが、それだけ江戸幕府がキリスト教を厳しく取り締まっていたことを示している。本資料は中国徳化窯で焼かれた白磁で、浦上村の潜伏キリシタンが所持していたものである。浦上三番崩れや四番崩れで浦上村のキリシタンたちが検挙された際、長崎奉行所に信仰物を悉く没収されたが、これらは、明治に入ると教部省に引き渡されている。しかし、本資料はこれを免れ、長く浦上村のキリシタンが秘かに所持していたものである。なお、東京国立博物館は本資料と同類型のマリア観音を所蔵し、これらは国指定重要文化財となっている。





### 31. 伝マリア観音像

#### *Small statue of Mary Kannon (tradition)*

年代不詳(17世紀か)  
梅光学院大学博物館

慈母観音を聖母マリアと同一視し、疑似信仰する形態のひとつで、潜伏キリシタンたちの祈りの象徴ともされる。禁教が厳しい地域で、特におこなわれていたもので、各地にマリア観音像が現存するが、本資料もそのひとつといえよう。両資料とも白磁で、ひとつは右腕にイエス・キリストを抱くマリア、もうひとつはイエスキリストを正面に抱くマリアで、いわゆる子持ち観音である。これらはともに廣津藤吉が、1939(昭和14)年に那覇で入手したものである。



## 32. キリシタン魔鏡

### *Magic mirror*

19世紀  
西南学院大学博物館

魔鏡とはmagic mirrorのことであり、一見すると普通の銅鏡であるが、光を照射すると図像が浮かび上がるものである。形状は鏡の表面に凹凸をつけたりするものや、裏面にその図像を鑄込んだものを嵌め合わせたものなどがあるが、本資料は後者にあたる。中国では紀元前2世紀頃から2世紀にかけて透光鏡と呼ばれるものが造られていた。本資料に光を照射すると中央に磔刑のキリスト、そしてこれを拝む聖母マリアがあらわれる。





# IV

## 海外交流の諸相

Various aspects of international exchange

九州各地では古くから大陸と交流しており、数多くの文物が行き交っていた。特に福岡では、中国および朝鮮半島から陶磁器類などが伝わっている。これらは博多地区の発掘成果からも明らかであり、多くの舶来品がもたらされていた。これらの遺物からは、中近世の日本、ひいては九州における海外交流史を紐解くことができる。



Various parts of Kyushu interacted in cultural exchange with the continent, which led to the distribution of cultural relics. Especially in Fukuoka, porcelain and ceramics from China and the Korean Peninsula were early in wide circulation. Exavacations in the Hakata district prove the existence of a multitude of foreign, imported goods. These exavacation results do not only offer an insight into Kyushu history of exchange during the Japan early modern period, but also provide an introduction to the actual situation.



### 33. 中国・天目碗

*Tenmoku bowl (China)*

12世紀前半  
福岡市埋蔵文化財センター

やや黒味がかった素地に黒釉をかけて焼かれた碗で、喫茶に用いられたと考えられている。底部には「陳大口」と墨書されている。



### 34. 中国・龍泉窯系青磁碗

*Celadon bowl (China)*

12世紀前半  
福岡市埋蔵文化財センター

龍泉窯で製作された碗。見込み(内部)には龍泉窯特有の花文を片切り彫り描く。



### 35. 中国・磁竈窯黄釉鉄絵詩文盤

*Pottery plate (China)*

12世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

磁竈窯で焼かれた陶器の盤である。盤とは大きな皿のことを意味する。内面には龍の文様を彫りこんでいる。





### 36. 中国・漳州窯系五彩碗

*Colored bowl (China)*

16世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

色鮮やかな五彩を施す碗である。16世紀のものと考えられる。外面、内面のそれぞれに異なる文様を描いている。



### 37. 中国・同安窯系青磁皿

*Celadon plate (China)*

12世紀後半  
福岡市埋蔵文化財センター

同安窯系青磁を特徴づけるものに文様がある。片切り彫りの文様を施し、それと共に櫛状の工具を用い細かい刻み目を入れる。



38. 中国・白磁四耳壺

*White porcelain pot (China)*

13世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

白磁の四耳壺。名前の通り肩部に四つの取手をもつ壺。時期は13世紀に位置付けられる。

39. 中国・連江窯系青磁碗

*Celadon bowl (China)*

12世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

連江窯で製作された青磁で12世紀のものと考えられる。やや黄緑が強い青色を呈し、内面に片切りの草文を彫りこむ。







#### 40. 高麗・青磁皿

*Celadon plate (Korai)*

11世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

高麗時代に焼かれた青磁の皿。見込みに草花文が施されている。



#### 41. 高麗・青磁碗

*Celadon bowl (Korai)*

11世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

高麗時代の青磁碗。高台は小さく低い。そこから口縁にかけて直線的に立ち上がる。



#### 42. 高麗・青磁蓋

*Celadon lid (Korai)*

11～12世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

青磁の蓋である。やや大きめのつまみがつき、外面には連弁文が施されている。



#### 43. 高麗・象嵌青磁皿

*Celadon plate (Korai)*

14世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

高麗青磁を特徴付ける象嵌を施した青磁の皿である。本資料は象嵌によって魚文が描かれている。





#### 44. 朝鮮王朝・粉青沙器印花金海銘皿

*Pottery plate (Korea)*

15～16世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

朝鮮王朝特有の粉青沙器である。内面には連圈文を型押しし(印花)、見込みには生産地と考えられる「金海」の銘が施される。

#### 45. 朝鮮王朝・灰青陶器皿

*Pottery plate (Korea)*

16世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

朝鮮王朝時代に焼かれた陶器の皿である。やや灰色がかった青色が特徴的である。



#### 46. 朝鮮王朝・白磁碗

*White porcelain bowl (Korea)*

16世紀  
福岡市埋蔵文化財センター

やや白みが強い白磁の碗である。体部はやや外湾気味に立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。



#### 47. 朝鮮王朝・褐釉陶器片口鉢

##### *Pottery bowl (Korea)*

16世紀

福岡市埋蔵文化財センター

陶器の片口鉢。やや大きい底部をもち、口縁にかけてゆるやかに外湾しながら立ち上がる。

### 寄稿 貿易陶磁器

現在、日本国内でも普遍的にみられる陶磁器は、古代中国の殷代に製造が開始されたと考えられる。中国では早くも新石器時代には窯を使用した硬質の土器を完成させ、殷代になると、独自の方法により人為的に施釉した「灰釉陶器」が製作されるようになる。これは、その後の磁器との対比から原始磁器とも呼称される。

春秋・戦国時代を経て漢代になると本格的な「青磁」が完成する。独特の透明ガラス状の青緑色はなにより焼成技術、および窯の進展によるところが大きい。その後華南においては引き続き青磁が製作され、多くの遺跡から出土している。一方、華北では「白磁」が製作されるようになる。白磁とは、白い素地に鉄分が含まれない無色の釉をかけ高温の還元炎焼成によって製作された磁器である。白磁は青磁の技術的発展に伴い発展する。

その後、唐代になると中国陶磁器史上の画期を迎える。一点は青磁で名高い「越州窯」の窯業開始で、もう一点は陶磁器を海外貿易の対象品とするようになったことである。陶磁器はアジア中に広がった。日本に陶磁器が流入するのもこの時期で、越州窯系青磁や華南産の白磁が多く出土している。これ以降、日本には数々の貿易陶磁器が流入することとなる。

越州窯は唐代以降、中心地として隆盛するが、宋代になるとその中心が移動する。これがいわゆる「龍泉窯」で、以降青磁の中心地として活躍する。日本国内での出土例も極めて多く、長期的な流入があったことも明らかになっている。同時期の白磁としては「景德鎮窯」が著名である。その他、宋代では喫茶用の碗が製造される。独特の黒釉が特徴的で、これも他の陶磁器に伴い、日本国内にも流入する。国内では「天目」と呼称され、茶道具として使用された。その後は、「青花」の流行に陶磁器史上の画期を求めることができる。いわゆる「染付」で、国内においてはその後17世紀に伊万里焼を嚆矢に製作が開始されている。

唐代の越州窯系青磁がアジア各地に広がったことは前述の通りであるが、朝鮮半島では越州窯青磁の技術的影響をうけ高麗青磁を完成させ、その後、他の窯の技術も取り入れると目覚ましい発展を遂げる。その中で、高麗は独自の「象嵌青磁」を生み出す。その後、朝鮮王朝の時代を迎えるが、高麗青磁の技術の延長として新たな陶磁器を創出する。それらを代表するものが、前期の「粉青」である。高麗青磁の技術を受け継ぎながらも、様々な文様を施す点などについては高麗青磁と大きく異なり、技術的革新その他の背景が考えられる。これらの陶磁器も中国産の陶磁器とともに日本国内で出土している。

福岡市埋蔵文化財調査課 文化財主事 中尾 祐太





# 論 考



# キリシタン資料の真偽性

西南学院大学博物館 学芸員  
安高 啓明

## はじめに

“キリシタン資料”と称するものは、博物館をはじめ、各地方自治体で所蔵されている。フランシスコ・ザビエルの来航以降、一世を風靡した南蛮文化は領主層に受け入れられ、キリスト教布教にあわせて各地に伝わった。南蛮意匠をほどこした煌びやかな資料の一方で、キリスト教布教や信仰に関する文物も確認されている。例えば、南蛮屏風、ザビエル像やマリア十五玄義図などの聖像画をはじめ、キリシタンたちが身に付けていた十字架やメダイ、ロザリオといった信仰物、さらには、キリシタン様式の墓碑も今日に残っている。キリシタン資料とは、広義ではキリスト教伝来期の南蛮文化、そしてキリシタン文化を包含するものであり、狭義ではキリシタン信仰と直接関係するものといえよう。

これらの資料は、歴史学、考古学、美術史学などによる成果に基づく実証性のあるものが原則であるが、一方で、確証のない真偽を疑うものもキリシタン資料として取り扱われていることがある。その資料の裏付けが先祖代々の言い伝え(口伝)でしかないもの。元来、キリシタンで、潜伏時代を過ごしてきた直系家族に伝わる真正もあれば、親類や知人、さらには古物商の手に渡ったものもあり、資料的裏付けを困難にしている実情がある。

江戸幕府の禁教政策下において、キリシタンは不遇な時代にあったことは周知の通りである。こうした悲劇の史実が、数多くのキリシタン資料を生んでいる。いわゆる、後世につくられた“偽物”は、原物が古物市場でも高値で取り引きされていることが、これに一層の拍車をかけているといえよう。そこで、本論では、これまで明らかにされているキリシタン資料の擬製について、実例をもとにまとめていきたい。

## 1 踏絵

踏絵はキリシタン詮索のために使われたほか、キリスト教ではないことを証明するための道具とされた。当初、紙踏絵が使われていたが、耐久性の問題もあって、木製にとってかわり、さらには真鍮製が造られるに至っている。真鍮踏絵は長崎の鋳物師である萩原祐佐が長崎奉行所の命をうけて20枚を製作し、これは長崎奉行所宗門蔵で管理された。地方で踏絵を所持することは制限されており、平戸藩に至っては、長崎奉行所からの踏絵借用にあたって、自藩で使用していた踏絵を長崎まで持参し、粉々にして破損するほどの徹底ぶりだった(安高啓明編『松浦家の名宝とキリシタン文化』西南学院大学博物館、2013年)。福岡藩や熊本藩など大藩は、自領で踏絵をもつことは許されたが、九州諸藩のほとんどは絵踏するときは、長崎奉行所から借用していた。

長崎奉行所が所持していた真鍮踏絵は現存19枚で、東京国立博物館で所蔵されている。これは、1874(明治7)年に長崎県令が教部大輔へ踏絵の引き取りを打診し、長崎から東京へ引き渡され、これが現在に至っている。つまり、長崎奉行所がかつて所蔵し、現在、東京国立博物館が所蔵している踏絵が、真正の踏絵ということになる。但し、現存19枚であり1枚が行方不明となっていることから、それがどこにあるのかが興味の対象とされている。行方不明となっている踏絵は、天草沖に沈んだとする話もあるが、それが以降どうなっているのか不詳である。

現在、多くの“真鍮踏絵”とされているものが各館で所蔵されており、記せば枚挙に暇がない。なかには、明らかに模造品までも確認できる。踏絵の図像はやや粗めにつくられているが(なかには踏ませたことにより摩耗したという説もある)、これに似せて作られていたり、素材そのものが異なっているものささえある。真鍮踏絵の重量は概ね1900g～2400gであり、これも大きな判断基準となる。メダイをはめ込んだ板踏絵の類にも同じことがいえ、木材の種類はもとより、メダイそのものが擬製のものもある。

なお、紙踏絵については、すでに模造品であることは指摘されている。紙踏絵の特徴は、江戸期の元号が記されあかとも真正かと思わせるものや、「切支丹伴天連ヲ踏マザル者獄門ノ事」・「黒田家之定」の表記、黒田藩の印やキリストの表記、IHS、「扇城吟社之章」などが印字されている。肥後熊本藩や長崎で紙踏絵が使われていたことは知られているものの、現存する資料の真偽は既に疑問視されている(片岡弥吉『踏絵』日本放送協会、1969年、



鶴田文史『西海の切支丹文化総覧』天草文化出版社、1983年、高倉洋彰『行動する考古学』中国書店、2014年)。歴史的にみれば、紙踏絵は江戸時代初期に極めて短期間に使われていたにすぎず、消耗も甚だしかったことから木製にとってかわられ、禁教下の大部分は真鍮製が使われている。仮に紙踏絵の原物が存在しているとするれば、稀代の資料である。つまり、こうした状況から考えても、現存する紙踏絵は、解禁以降に作られたと推測するのが自然であり、鶴田氏は長崎において版製作業者が商品として作製した可能性までも指摘している。いわゆる、外国人向けの“お土産”として作製されたのであって、紙踏絵の原物とは当然言えないであろう。

## 2 十字架

十字架は原城跡や博多遺跡群などで出土しており、真鍮製や鉛製など発掘成果が挙げられており、成分分析を含めて確かなキリシタン資料となっている。他方、海外から持ち込まれ、これが近世のキリシタンたちが身に付けていたものかのように説明をみる十字架もある。なかでも、ここで取り上げる、観音坐像付十字架は擬製の代表的なもののひとつとして挙げることができよう。

観音坐像付十字架は、西南学院大学博物館も所蔵するが、縦252mm×横200mm、重量540gのものである。中央に合掌した座像が配され、剣先を放射線状に伸ばした円形光背を帯びている。十字架の先は花形に尖っており、さらに四方ともに十字の穴が開いている。材質も鉄のような質の悪いもので、重量感がある。

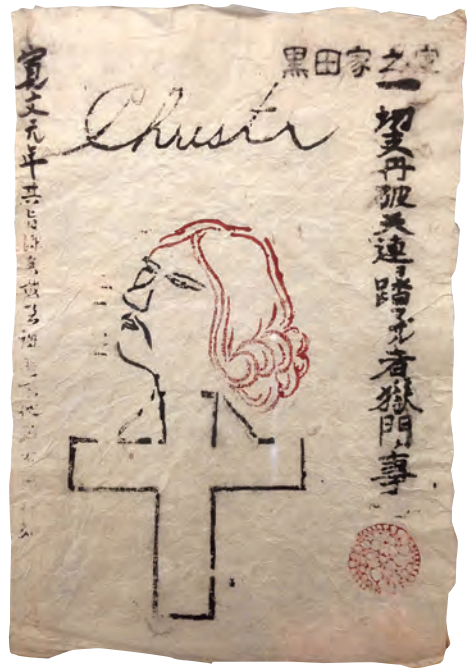
これはあたかも潜伏キリシタンたちが信仰していたかのような印象をうけるものであるが、その真偽性はすでに多くの研究者に指摘されている。H. チーリスク氏は、同資料を「十字架の阿弥陀仏像」として取り上げており(『キリシタン史考』聖母の騎士社、1995年)、1945(昭和20)年から1950(昭和25)年頃に名古屋でつくられたものであると断言している。発案者も知られており、これは“外国人向け”のお土産品としてつくられた。これが各地に出回っており、特にキリシタンと所縁のある地域では、キリシタン信仰物かのように口伝され、定着しているのである。なかにはキリシタンたちの子孫のなかでも、語り草となっていることさえある。

この観音坐像付十字架の意匠は、19世紀のヨーロッパで流行していた新ゴシック風であり、日本の禁教時代である17世紀から19世紀とはほとんど重複しない。また、当時の厳しいキリシタン政策が断行されているなかで、一見して明らかな十字架を製造することは不可能であり、ましてや所持することさえもできないであろう。これは、当時の信仰形態を考えれば論じるまでもなく、相違工夫した潜伏信仰とは明らかに一線を画す“モノ”である。また、潜伏キリシタンたちが信仰する対象であれば、明らかに十字架意匠のなかで仏を配する必然性も感じられない。実際に、潜伏キリシタンたちが信仰していた資料は、現在、東京国立博物館で所蔵されているが、これらのなかでも観音坐像付十字架のようなものは見当たらない。江戸時代の潜伏信仰を理解していれば、この観音坐像付十字架は甚だ矛盾するものであり、真正とは到底いえない、不出来なキリシタン資料といえよう。

## 3 マリア観音

潜伏キリシタンたちは、江戸幕府の禁教政策下において、ある種のものを隠れ蓑にしながら、信仰を維持していた。絵踏などの宗門改めをおこない、寺請制度を表向きは受け入れながら、秘密裏に信仰する組織をつくっていた。生月島のかくれキリシタンは、潜伏時代を維持した一形態であるが、ここからも当時のキリシタン信仰の姿を見出すことができる。

キリシタンたちは表だって信仰できないことから、その形跡を残すことは許されなかった。天草では隠し十字架や銭仏といった工夫して祈りの対象を創出していたことは以前指摘した通りである(安高啓明編『海流に魅せられた島 天草』西南学院大学博物館、2011年)。また、長崎浦上村の潜伏キリシタンたちが信仰していたものは、



紙踏絵(西南学院大学博物館所蔵)



観音坐像付十字架(西南学院大学博物館所蔵)



マリア観音像(西南学院大学博物館所蔵)

前述したように東京国立博物館で所蔵されており、これらを見れば毘沙門天や獅子、観音像などといった一見すると、決してキリシタンとはわからないものを信仰の対象としていたことがわかる。これらの信仰は、疑似信仰といわれるものであり、その代表的なものがマリア観音であろう。

マリア観音は、慈母観音を聖母マリアと同一視して祈りを捧げていたものであり、潜伏キリシタンたちが行っていた疑似信仰である。実際に、東京国立博物館に浦上村の潜伏キリシタンたちが祈りを捧げていたマリア観音が所蔵されている。中国徳化窯のものが多く、長崎貿易で輸入されていたものとなろう。厳しい弾圧下において、創意工夫していたキリシタンたちの信仰の結晶ともいえる。

このマリア観音像は、一見すると観音像である。これがマリア観音像と認定されるには、キリシタンの口書などの裏付けが必要である。東京国立博物館が所蔵しているマリア観音像は、浦上村の潜伏キリシタンたちが長崎奉行所に捕縛され、ここで厳しい拷問を受けながら、供述がとれ、その証拠物として没収されたものである。文献資料により裏がとれなくては、マリア観音像を絶対的な真正資料として扱うには危険がある。また、東京国立博物館所蔵のマリア観音像と同じ作例のものであれば、順じて扱うこともできようが、何より当時の口書が最重要となってくる。

西南学院大学博物館が所蔵するマリア観音像は、浦上村の潜伏キリシタンが没収を免れて所持したもので、長崎バプテスト教会に寄付されたことに由来する。寄贈主は代々浦上村でキリシタンであった家という確認もとれている。また、作例も東京国立博物館所蔵のマリア観音像と一致することから、極めて確実性が高いキリシタン資料といえる。ただし、こうした

裏がとれないマリア観音像の真贋を見極めるのは非常に困難である。これは、信仰を守るために創意工夫したキリシタンたちの努力がそうさせたともいえる。それゆえ、文献資料や美術史、民俗学的調査により、確証が得られないマリア観音像は「伝」を付けるのが最も適切な処置といえるであろう。

## おわりに

キリシタン資料について、そのなかでも代表的なものである踏絵、十字架、マリア観音像について取り上げてきた。光と影をもった日本キリスト教史は、世界的にみても稀な事象であった。こうした歴史をもつ日本において、海外ではみられないようなキリシタン資料が生まれたのである。真正のキリシタン資料の一方で、擬製がつくられたのは、ある層の要望に応えたものであるといえる。それは、①外国人向けのお土産、②高値取引による商業用として製作されたのである。

外国人向けのお土産としてつくられたのは、結局は需要があったためである。1874(明治7)年に教部省に踏絵やキリシタン資料が一括して長崎県から教部省に引き渡されたのも、フランス人が購入希望したことをうけての措置である(安高啓明『歴史のなかのミュージアム』昭和堂、2014年)。踏絵を購入できなくても、一度見せてもらいたいという程で、外国人の強い興味対象となっていたのである。日本が禁教政策をおこなっていたことは、各地で知られていたところであって、江戸時代の特異な禁教政策が、かえって外国人コレクターへの対象となった。結果として、長崎のキリシタン資料は明治政府のもとで厳密に管理されたために、踏絵などの重要品が外国人の手に渡ることはなかった。しかし、そこで生まれたのが“お土産品”であって、これらが各地で製作されたのである。

また、古物商のなかでも稀少なキリシタン資料は高値で取引されていることも、擬製を生んだ要因である。なかには精巧なものもあるなど、一見すると判断し難い資料もある。これとは逆に粗悪のものだったり、あらゆるものに“十字架”を鑄込む資料も作製された。繰り返しになるが、禁教下の潜伏時に十字架をしっかりと鑄込むのは、当時の禁教政策上、そして信仰形態上から考えてもありえない。解禁後にわざわざ十字架を入れる必要性もないことを考えれば、故意的に作製されたとみることが一般的だろう。これらが代々、キリシタンだったという家に持ち込まれることによって、口伝として正当性を与え、“歴史がつくられる”ことになってしまうのである。

キリシタン資料の珍奇性は日本を問わず、海外でも認識されているものであって、歴史的価値が高いことは言うまでもない。東京国立博物館所蔵のマリア観音像なども一括して国指定重要文化財である。それゆえに、多くの偽物がつくられていったのであり、これを取り扱う学芸員は慎重に対応していかななくてはならない。



# 神戸市立博物館所蔵《聖フランシスコ・ザビエル像》についての一考察 —— 反映されたイエズス会の布教美術政策 ——

西南学院大学博物館  
内島美奈子

## はじめに

神戸市立博物館所蔵《聖フランシスコ・ザビエル像》(図1)は、実在の人物の肖像であると同時に、日本キリスト教史における重要な資料のひとつでもある。本作品の和洋折衷とも言えるその画風には、当時の背景が深く結び付いていたと指摘される。本稿では、この点について日本キリスト教史ならびに美術史の先行研究をもとに、イエズス会の布教美術政策に注目して若干の考察を試みたい<sup>1</sup>。

## 1. 日本におけるキリスト教の伝播

1549年、スペイン人宣教師フランシスコ・ザビエル(1506-52)がキリスト教を布教するために日本へやって来た。その2年後にザビエルは中国布教のため日本を去り、その後を継いだ宣教師たちによって布教は進められ、キリスト教は日本中に広まっていった。しかし、1587年に豊臣秀吉による伴天連追放令が出され、公的にはキリスト教の布教は禁じられる。さらに、1614年の禁教令ではキリスト教を信仰することが禁じられ、1637年の天草・島原一揆勃発以降、幕府による取り締まりは厳しいものとなっていった。ただし、禁教令発令前までは、南蛮貿易と宣教師たちが結びついていたことから布教は黙認されていた。

この約半世紀間におけるキリスト教の布教は、ザビエルが所属するイエズス会が主に担っていた。イエズス会とは1540年に教皇パウルス3世によって認可されたカトリック修道会のひとつである。イエズス会は創立当初より海外布教を重要な活動目的のひとつとしており、初代総長イグナティウス＝デ＝ロヨラ(1491-1556)がポルトガル王にその植民地における布教を依頼されたことを契機にアジアに進出していくことになる。イエズス会は布教にあたって、積極的に美術(特に聖画)を使用した<sup>2</sup>。イエズス会の宣教師たちはイエス・キリストや聖母マリア、その他の聖人たちが描かれた聖画を携えて布教にまわったという。言葉が通じないひとびとに教義をわかりやすく伝えるために画像の活用が重要だったと推測される。

しかしながら、長いキリスト教の歴史のなかで、信仰における聖画の使用は偶像崇拜の恐れがあるとして、しばしば問題となっていた。ザビエルが来日する数十年前には、ルターの抗議にはじまる宗教改革がドイツを中心におこっており、ドイツを中心とするプロテスタント側は聖画の使用に批判的であった。それに対してカトリック側は、聖画はあくまで信仰の手段であるとしてその正当性を主張していたのである。そのような背景からも、対抗宗教改革の先鋭であったイエズス会が積極的に聖画を用いていた点との関係が指摘される。

来日当初のイエズス会士たちは聖画を日本に送ってくれるように西欧側に依頼していた。だが、船の難破などで遠く離れた日本まで届くことはなかったという。そこで、イエズス会士たちは現地の日本人に聖画制作の技術を学ばせることにした。その技術を学ぶ場所としてセミナリオや画学舎などの施設が知られている。1583年には、イエズス会士で画家としての修行を積んだジョヴァンニ・ニコラオが来日し、指導にあたった<sup>3</sup>。当時、聖画の需要は高く、聖画制作は活況を呈していたという。徳川幕府時代には250前後の教会があったと推測され、礼拝用の聖画が多く必要とされた<sup>4</sup>。また、塚原氏によると、日本中の教会ばかりではなく、信者への贈物として、また中国など海外に送るためにも必要とされたという<sup>5</sup>。これらの施設は禁教によって次第に姿を消していった。

## 2. フランシスコ・ザビエル図像の展開とその背景

当時、工房などで制作された礼拝用の聖画は、禁教の時代に破壊された。よって、聖画の現存例は、同時期に工房で制作されたと推測される風俗画などに比べて極めて少ない。現存しているのは徳川幕府によって押収されたもの、あるいは隠れキリシタンの家などに代々伝わっていたものに限られるという<sup>6</sup>。本作品はそのひとつであり、1920年に高槻で発見されたものである<sup>7</sup>。本作品をふくめ日本に現存する、ザビエルを描いた作品は限られているが、日本との関係、そして西欧における重要性から、当時ザビエル像は他にも制作された可能性は高いと思

われる。

一方、西欧では多数のザビエルを描いた作品が現存する。特に西欧の16世紀末以降において多く見られるという。その背景には、カトリック教会が海外布教活動に力を入れていた点が影響している。ザビエルは日本やアジア地域における布教の功績をたたえられていた。日本で布教が禁止されて殉教の可能性があることを知りながらも、西欧から多数の宣教師たちが彼に続き、日本に渡航しようとしたという。そして、ザビエルは1619年に列福され、1623年に列聖された。列聖のために事跡調査が行われ、伝記が16世紀から17世紀にかけて20点程刊行されたとされる<sup>8</sup>。それにともない、伝記の挿入画や、教会内にザビエルの生涯の物語が描かれた。とりわけ、聖人として奇蹟の行いが重要であることからその様子が多く描かれた。たとえば、ルーベンス作《聖フランシスコ・ザビエルの奇跡》(1617-18年頃)、ニコラ・プッサン作《ザビエルの奇跡》(1641年)などの大作がある。本作品も列聖の前後に描かれたと先行研究によって指摘されている<sup>9</sup>。

また、伝記などの挿絵として多くのザビエルの単身像が描かれた。その特徴として、十字架、心臓、太陽などを持つこと、視線を天に向けること、胴衣の胸を開くことがあげられている。これらの特徴はいずれもザビエルの強い信仰心に由来するものであり、しばしば統合して描かれることもあった。特に、燃え上がるように描かれた心臓は宗教的情熱の象徴である<sup>10</sup>。

これらの特徴をもつザビエル像を、木村氏は2つのタイプに大別している。ひとつは手を胸の前で合わせる、もしくは交差させる様子で描かれた「祈祷する聖フランシスコ・ザビエル像」である。もうひとつは、「燃える熱情を示す聖フランシスコ・ザビエル像」であり、衣服を手でつかみ胸の部分をはだけるようなしぐさをしているものである。この分類において、本作品は前者に当てはまる。この分類をふまえて、当時の日本で目にすることが出来たとされる作例から本作品の着想源とされる作品が推測されている。先行研究によると、多数出版されたザビエルの伝記の挿絵を参考にしているという。その中でもフランドルの版画家一族ヒエロニムス・ヴィーリクスによるオラティオ・トルセッリーノ『聖ザビエル伝』の口絵版画(図2)が挙げられている。トルセッリーノの著作は多数出版されており、そのいくつかが日本に渡った可能性が指摘される<sup>11</sup>。

本作品を見てみると、先にザビエル単身像の特徴として挙げた、手を交差した祈る姿で描かれ、十字架と心臓を持っていることから、おおむねザビエル像の図像伝統に従っているといえる。しかし、参照したとされる西欧の作例と比較すると、西欧の作例を単に模倣してはいないことは明らかである。つまり、指摘されるように複数の作例を参考にし、西欧の図像の伝統を採用しながらも、西欧の聖画とは全く違う様相を呈したものとなっているのである。当時の日本人に模倣するだけの能力がなかったからという単純な理由ではない。これはイエズス会の布教方針に深く関係しているのである。

### 3. 本作品とイエズス会の布教美術政策

この点を考えるにあたって、ザビエルの単身像の特徴である、天を仰ぐ様子に注目したい。これは若桑氏によれば、対抗宗教改革期の殉教図像の表現を思わせるという。対抗宗教改革期には、西欧ではバロック美術に代表されるドラマチックな表現が好まれ、殉教者の表情は苦痛のなかでの恍惚とした様子で描かれた。さらに、この時期には殉教していない聖人たちも、さながら殉教者のように恍惚とした様子で描かれたという。たとえば、イタリア出身の聖人アッシジの聖フランチェスコは殉教していないものの、胸に十字架を抱き恍惚とした表情で描かれた<sup>12</sup>。聖フランチェスコと同じ名を持つザビエルは、混合して考えられるようになった可能性が指摘される<sup>13</sup>。同名の聖人が混合した図像を持つ例はしばしば見られるものであり、本作品には聖フランチェスコの図像を参照した可能性もあげられている。

一方、本作品のザビエルを見てみると、恍惚とした表情ではなく、やや硬い表情で視線を上に向けている。この表情からは殉教者としてのザビエルを読み取ることは難しいであろう。さらに、着想源として挙げた先行例では、聖人が見つめる先には光があるのみで、神の存在が暗示されるだけであった。それに対して、本作品ではミニチュアの磔刑上のイエスと視線を合わせているかのように描かれている。

このような描写の差異は何に起因するのだろうか。それは西欧の図像の決まりごとが日本では容易に理解されない点が考慮されたからだと考えられよう。つまり、本作品を礼拝する観者である日本人が念頭に置かれ制作されたのだと推測される。西欧では聖画を見慣れた観者たちは、ザビエルが見つめる先にイエスがいることを想像することができるが日本ではそうはいかないのである。教義を平易に表現すると同時に、教義に基づいた巧みな表現も見つけられる。キリスト教美術において、描きこまれた人物たちの視線は重要な役割を与えられる。例えば、観者に視線を送り、イエスや聖母に観者の視線を誘導することがある。本作品では、本作品の主人公であるザビエルの視線から、磔にされたイエスへと視線は誘導される。イエスとの視線の交換は、ザビエルの信仰心をうかがわせると言えるかもしれない。また、本作品に描きこまれたケルビム(智天使)の視線も指摘できよう。



ケルビムは3体描きこまれており、彼らの視線はお互いに視線を送ることにより、3角形を形づくっており、キリスト教の重要な教義である三位一体を暗示させる。木村氏が指摘するように、師であるニコラオがイエズス会士であることから、弟子たちに教義を説きながら技術の指導を行っていた可能性がある。

西欧の聖画では聖人を描く際、背景には風景や室内などを挿入することが多い。だが、本作品の先行例として挙げられたものは、伝記の挿絵であることもあり、背景には何も描かれていない。そのため先行例を参考とすることができなかつたのかもしれない。そこで、本作品を描いた画家は日本の屏風に見られるような表現を用いた。つまり、一色で塗りつぶされた雲の切れ間に情景を描くという表現である。ここでは磔刑図によって、ザビエルのいる空間と、雲の切れ間からうかがえる天の空間とがつけなげられており、調和ある巧みな接続がなされているといえる。ここに、ザビエル、イエズス会、イエス、そしてケルビムがいる天の世界とのつながりが表現されているかもしれない。

このような作風、つまり日本人にわかりやすく、かつ日本の趣味に合わせられた表現は、イエズス会の布教方針が反映した画業の教育に由来すると指摘される。それは、日本におけるキリスト教にもとづく教育施設の設置を行った、東方巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ(1539-1606)が書き残した文章からうかがえる。彼は、日本の固有の文化を理解し、その文化に適合した布教を行うことが重要であると考えていた。そして、日本と西欧の美術の形式や好みは異なっていることを述べており、「日本人の心をとらえる聖画」を現地の日本人に描いてもらうことが大事だと考えたのである<sup>14</sup>。先に指摘した点や、万葉がなの文章が書き込まれていることなどからうかがえる。このような方針により、単なる西欧画の模写だけではなく、わかりやすく、かつ日本の美術と融合したような作品が生まれ出されていったのである。本作品も間違いなくそのひとつだと思われる。

## おわりに

ザビエルの後を継いだイエズス会の宣教師たちはザビエルの考えを受け継ぎ、日本の文化を尊重した。それは本作品に見られる工夫からもうかがえた。日本文化を尊重するという考えは布教活動のためではあったが、単なる模倣ではない、日本と西欧の文化が融合した新しい美術を生み出した。西欧文化の根幹ともいえるキリスト教の普及は、単なる宗教の伝播を超えた日本と西欧との文化の出会いであったのである。本作品はその当時の状況を伝える資料であり、「日本人の心をとらえる聖画」のひとつであったと思われる。



(図1)《フランシスコ・ザビエル像》17世紀初頭



(図2)トルセッリーノ『ザビエル伝』第2版、フィレンツェ、1589年

## 註

- 1 ザビエルの基本情報として浅見雅一『フランシスコ＝ザビエル－東方布教に身をささげた宣教師』(山川出版社、2011年)を主に参考にし、美術史の分野における先行研究として木村三郎『ニコラ・ブッサンとイエズス会画像の研究』(中央公論美術出版、2009年)を主に参考にした。
- 2 イエズス会の美術政策については、若桑みどり『聖母像の到来』(青土社、2008年)に詳しい。
- 3 坂本満、菅瀬正、成瀬不二雄『原色日本の美術第25巻 南蛮美術と洋風画』小学館、1970年、180ページ；塚原晃「初期洋風画と「絵画と印刷のセミナー」－泰西王侯騎馬図屏風などの制作年代・環境をめぐる試論」『神戸市立博物館研究起要 第29号』2013年、4ページ。
- 4 塚原、前掲論文、6ページ；五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館、1990年、12ページ。
- 5 塚原、前掲論文、5ページ。
- 6 塚原、前掲論文、3ページ。
- 7 高松右近の旧領の民家に隠されていた「開けずの箱」から大正9年に発見された。岡泰正「初期洋風画をめぐる」『古美術』、第101巻、三彩社、1992年、44-49ページを参照。
- 8 浅見、前掲書、79ページ。
- 9 本作品制作年代の議論は、1623年の列聖の前か後かという点が争点となっている。列聖前の説では、記銘の冒頭に認められるS.P.FR…の「S」の存在が「聖人(Saint)」を意味することが根拠とされていた。だが、木村氏は列聖以前の伝記にはすでに「S」が確認できるとし、根拠にはならないと否定している。木村、前掲書、346ページ。
- 10 木村三郎『名画を読み解くアトリビュート』淡交社、2002年、89ページ。
- 11 木村三郎『《聖フランシスコ・ザビエル像》の画像展開と17世紀初頭におけるその作品目録』『日本大学芸術学部起要』1996年、87-99ページ。若桑氏は第二版(1589年)の口絵版画と、同じくトルセリノによる1596年にローマで刊行された著作のなかのテオドール・ハレの版画を紹介している。(若桑、前掲書、245ページ。)
- 12 若桑、前掲書、245ページ。
- 13 若桑、前掲書、245-6ページ。
- 14 若桑、前掲書、154ページ。

## 図版典拠

図1 木村三郎『ニコラ・ブッサンとイエズス会画像の研究』中央公論美術出版、2009年。

図2 若桑みどり『聖母像の到来』青土社、2008年。



# 連携の効果と課題 —継続性を求めて

西南学院大学博物館 学芸員  
安高 啓明

## はじめに

官業と民業が協働参画する“官民連携”、そして、博物館と学校が共同事業をおこなう“博学連携”、産業と大学による共同研究・開発といった“産学連携”など、今日では関連業態との連携事業が積極的に展開されている。この背景には、双方へのメリットが認められたため、文化事業に限らず、商業活動にも転換されている。大学や附属研究所で商品開発したものを、民間で実用化して流通にのせていることは、その代表例といえよう。研究成果の実用化は、研究教育という領域に留まるものではなく、まさに実社会への転用という実践教育とも位置付けることができる成果である。

同じく文化事業の連携をみても、双方に生じるメリットを認識したうえでの動きとなっている。“教育”や“研究”という枠組みの中で、お互いの利点を発揮する活動は、サービス提供者への既成利益に新たな付加価値を与えることになる。それが、教育の充実という形で表出し、“連携”の意義を創出することになる。

しかし、二者、三者が連携することにより生じるメリットの一方で、あらゆる面で負担も生じることとなる。非日常的な業務形態になるうえ、その事業規模に比例して負担は大きくなっていく。負担面が創出されるメリットを凌いでしまえば、持続する連携活動を困難とするだろう。つまり、連携が生み出す効果や意義、これに対する起り得る問題も予見していくことが必要となる。そこで、本論では、本学博物館がおこなってきた連携事業の具体的事例のなかから見出すことのできる効果と課題について検討していくことにする。なお、博物館連携事業については、拙著『歴史のなかのミュージアム』(昭和堂、2014年)にも収めているのであわせて参照いただきたい。

## 1. 連携の具体事例

本学博物館で実施している連携事業は、“展示”をひとつの活動軸としている。博物館教育と学校教育との大きな違いは、実物教育、ひいては直観教授による鑑賞教育にある。その根幹にあるものは、博物館活動の基本である展示が教育ツールである。そこで、本学博物館では年に2回開催している特別展のなかから、大きく次のふたつの系統からなる連携事業を実施している。

### 地域博物館連携

西南学院大学はキリスト教主義の教育を展開していることから、大学博物館でも「キリスト教文化」に関する展覧会を開催している。これにあたり、大学所在地の福岡をはじめとする九州各地のキリスト教の調査をおこなっており、この研究成果を展示に反映している。それは、歴史学や考古学、美術史学の要素を取り入れたものとなり、学生教育ならびに地域住民への開放による社会貢献、地域還元をおこなっている。

具体的に実施例を挙げると次のようになる。①「信仰とその証」(2009年度春季)、②「南蛮の鼓動」(2010年度春季)、③「海流に魅せられた島 天草」(2011年度春季)、④「平戸松浦家の名宝とキリスト文化」(2013年度春季)は、本学博物館でおこなった“九州のキリスト教シリーズ”である。①は島原市・南島原市、②は大分県・大分市、③は天草市・天草市立天草キリスト教文化館、④は平戸市・松浦史料博物館から協力を得て開催した。キリスト教資料や関連作品、そして考古学遺物などから、各地に残るキリスト教文化の実像に迫った内容である。各自治体や博物館で展示されている資料の一部を、大学博物館で展示することで、展覧会内容の質的向上にともなう教育効果、さらには見学者を現地へ赴かせる誘因となった。いわば、学生教育に限らず、生涯学習の機会の提供となった。なお、④では、松浦史料博物館の常設展示室で、本学博物館所蔵資料を中心とした関連展覧会を実施するなど、共同事業のさらなる新展開となった。展覧会内容はもとより、大学博物館の活動や所属教員の研究成果を見学者に示すことなど、大学広報の役割を担うことにもつながった。受け入れの松浦史料博物館でも、地域住民をはじめとする来館者へのサービスにつながるなど、両者にとってメリットがあった。



平戸松浦家の名宝とキリシタン文化  
(於西南学院大学博物館)



日本キリスト教史の展開(於松浦史料博物館)

## 大学博物館連携

1996年に「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」(学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会)が報告されたことをきっかけに、全国の大学に博物館や美術館の設置が相次いだ。大学の学内組織であることや学校環境、そして国立博物館・地域博物館と比べると歴史が浅いこともあって、大学博物館の存在が一般に周知されているとは言い難いのが実情である。歴史ある資料や研究素材(学術標本)などを学生はもとより、地域社会へ公開することは、大学博物館に求められていることで、「社会へ開かれた大学の窓口」としての機能になる。

そこで本学博物館では、大学博物館の共通する役割である“大学と社会との接点”となるべく、大学博物館の所蔵資料を博物館の原理原則である“展示公開”を通じた連携事業を展開している。具体的な実施例としては、⑤「イコン—東西聖像画の世界」(2011年度秋季)、⑥「閉ざされた島 開かれた海—鎖国のなかの日本」(2012年度春季)、⑦「日本信仰の源流とキリスト教」(2013年度秋季)、⑧「海路—海港都市の発展とキリスト教受容」(2014年度春季)をおこなっている。これらは、大学博物館共同企画シリーズとして開催している。

⑤は玉川大学教育博物館と実施したもので、本学と共通する所蔵資料であるキリスト教聖像画—イコン—to特化した美術展示をおこなった。⑥では、神戸大学海事博物館が所蔵する海事資料を中心とした歴史資料により、鎖国下の日本の実情に迫った。なお、本学博物館での会期終了後には、神戸大学海事

博物館で本学博物館所蔵資料を中心とした同テーマの展覧会を開催した。⑦は“信仰”をテーマとした展覧会で、本学所蔵資料と國學院大學博物館の所蔵資料によって、キリスト教と神道から日本人の宗教観の源流に迫ったものである。会期終了後には、國學院大學博物館で巡回展示を開催した。また、両大学博物館での展示期間にミュージアム・トークや公開講演会を開催し、教育普及に努めた。

大学博物館の所蔵資料は、一般にはまさに“秘蔵”コレクションの側面が強い。また、地域博物館とは異なる性格の資料も所蔵するなど、一般来館者には斬新に見えるようである。こうしたバラエティーある資料に加え、それを専門的に調査研究している教員や学芸員からの講演会は好評であり、楽しみにしているリピーターの数も増



閉ざされた島開かれた海—鎖国のなかの日本  
(於神戸大学海事博物館)



日本信仰の源流とキリスト教  
(於國學院大學博物館)



えてきている。また、複数館で開催したことで、効果的な教育活動と大学の広報活動をおこなうことになった。より一層の連携の充実のために、大学博物館連携のロゴを作成し、一般にも親しめるような事業としている。単館では困難な付加価値を連携事業により生み出し、学生教育ひいては地域社会に還元している。まさに、そのイメージを右に示したロゴに反映している。



## 大学博物館連携

### 2. 連携の発展形態

上記した地域博物館と大学博物館との連携は、“特別展”という有期の単発的な事業である。共同研究の成果発表としては、非常に効果的な事業ではあるものの、一過性のものになってしまう可能性がある。両者間で連携協定を締結することにより、内部における恒常的な事業継続は図られているものの、一般への発信となると、別の手段が必要となろう。そこで本学博物館では、地域博物館に恒常的な特別ブースを設け、連携活動の充実に努め、目にみえるかたちでの発信をおこなっている。また、この事業形態の特徴としては、博物館産業にも協力を得ながらおこなっていることが挙げられる。

その具体例として、天草市立天草キリシタン館内に、特設ブースを置き、天草市の歴史・文化をテーマとした展示「天草四郎の姿」(2014年～)をおこなっている。本学博物館が所蔵する資料のなかから、天草四郎について記述しているところを紹介している。天草四郎の姿を当時描いた資料は存在しないことから、その容姿や性格は文字資料から迫るほかない。そこで古文書の展示をいかに来館者に伝えられるのかということも考えながら、効果的なパネルなど意識した展示活動をおこなっている。歴史学研究成果ばかりでなく、博物館展示論を取り入れたものとなっており、学芸員を目指す学生・院生にも授業の素材として提供できる有効な実践教育となっている。

この事業を実施するにあたっては、企画趣旨に賛同して協力いただいた、(株)ツカサ創研(本社：熊本)から無償で展示ケースやパネルなどを提供いただいた。現地での調整や先方の学芸員の要望を取り入れながら作製し、設置に至っている。また、効果的な教育・広報を展開するためのチラシは、(株)インテックス(本社：長崎)に協力いただき、見学者に対して同取り組みの理解を促した。

博物館界の向上を考えた場合、関連業種に協力を得ることは必須と考えている。博物館産業は博物館活動を支えているのが実情で、質の高い展示会の内容にするため、“展示空間”や“教育媒体”の作製といった後方支援をうけている。つまり、博物館同士だけではなく、より良い展示・教育を実施するためには、博物館産業との協働体制が博物館活動の充実化へとつながるのである。産・官・学の三者にメリットがある、トリプル・ウィンの関係構築を目指した連携事業となっている。これについてもロゴを作成しており、持続的な連携関係の構築のもと三者が生み出す価値を意識して作成している。なお、この産官学連携事業は、現在、原城図書館とも協議中であり、本展示会関連イベントとして“せいなんおでかけワークショップ”も実施予定である。大学の地域貢献、そして地域の文化意識の向上のためはもちろん、学生への実践教育の機会の選択肢を広げる事業に発展している。



## 西南学院大学博物館 産官学連携事業



産官学連携展示風景(於天草市立天草キリシタン館)



産官学連携展示ブース(於天草市立天草キリシタン館)





■西南学院大学博物館2014年度春季特別展 大学博物館共同企画Ⅳ「海路」出品目録一覧

I. 描かれた海的路

番号	資料名	英訳	年代等	数量	所蔵先
1	山田長政軍船図	Picture of Yamada Nagamasa's warship	19世紀	1	神戸大学海事博物館
2	海路図屏風(左隻)(右隻)	Figure Screen of sea route map	18世紀	1	神戸大学海事博物館
3	海路絵図巻(複製)	Picture scroll of Sea route map(replica)	18世紀	1	神戸大学海事博物館
4	西国海上之図	Picture of Saigoku sea	19世紀	1	神戸大学海事博物館
5	従大坂至唐津海路図	Sea route map to Osaka	18世紀	1	神戸大学海事博物館
6	望遠鏡(森仁左衛門作製)	Telescope(made by Mori Jinzaemon)	1720年頃	1	神戸大学海事博物館
7	磁石	Magnetic compass	20世紀	1	神戸大学海事博物館

II. キリスト教史の展開

8	フランシスコ・ザビエル像(複製)	Portrait of St. Francisco Xavier(replica)	17世紀	1	神戸市立博物館
9	都の南蛮寺	Picture of Namban temple	16世紀後半	1	神戸市立博物館
10	メダイ 鋳型	Mold of medal	16～17世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
11	メダイ	Medal	16～17世紀	2	福岡市埋蔵文化財センター
12	天草四郎	Ukiyo-e of Amakusa Shiro	1874(明治7)年	1	西南学院大学博物館
13	天草軍記	Amakusagunki(Records of Amakusa-Shimabara rebellion)	19世紀	1	西南学院大学博物館
14	キリシタン制札	Proclamation banning Christianity	1682(天和2)年	1	西南学院大学博物館
15	宗門改影踏帳	Documents with history of the ban on Christianity	1852(嘉永5)年	1	西南学院大学博物館
16	筑後国宗門手形	Religious census certificates of Chikugo Province	1798(寛政10)年	1	西南学院大学博物館
17	出島図	Map of Dejima	1735(享保20)年	1	西南学院大学博物館
18	紅毛人プラケット	Small wall hanging of Dutch made of lacquer	18～19世紀	1	西南学院大学博物館
19	紅毛人遠見之図	Picture of Dutch	19世紀	1	西南学院大学博物館
20	米利幹事略	Records written concerning events with America	19世紀	1	西南学院大学博物館
21	安政五ヶ国条約(写)	The United States-Japan Treaty of Amity and Commerce(copy)	19世紀	1	西南学院大学博物館
22	キリシタン制札	Proclamation banning Christianity	1865(慶応4)年	1	西南学院大学博物館
23	宗門鑑札	Religious sect license	1866(慶応2)年	2	梅光学院大学博物館

### Ⅲ. 祈りのかたち

番号	資料名	英訳	年代等	数量	所蔵先
24	唐国漂流物語	The story of drift to China	19世紀	1	神戸大学海事博物館
25	漂流八ヶ条	Eight treaties about drift	19世紀	1	神戸大学海事博物館
26	異国船漂流之節御手当之儀 被仰出候御書付控	Rules about Drifter from China	18世紀	1	神戸大学海事博物館
27	絵馬(妙見丸)	Votive tablet of sailors ( Myokenmaru)	19世紀	1	神戸大学海事博物館
28	南蛮船絵馬	Votive tablet of Westerner's ship	19世紀	1	西南学院大学博物館
29	南蛮人行列絵馬	Votive tablet of Westerner's parade	19世紀	1	西南学院大学博物館
30	マリア観音像	Small stauue of Mary Kannon	17世紀	1	西南学院大学博物館
31	伝マリア観音像	Small statue of Mary Kannon (tradition)	年代不詳 (17世紀か)	2	梅光学院大学博物館
32	キリシタン魔鏡	Magic mirror	19世紀	1	西南学院大学博物館

### Ⅳ. 海外交流の諸相

33	中国・天目碗	Tenmoku bowl(China)	12世紀前半	1	福岡市埋蔵文化財センター
34	中国・龍泉窯系青磁碗	Celadon bowl(China)	12世紀前半	1	福岡市埋蔵文化財センター
35	中国・磁竈窯黄釉鉄絵詩文 盤	Pottery plate(China)	12世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
36	中国・漳州窯系五彩碗	Colored bowl(China)	16世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
37	中国・同安窯系青磁皿	Celadon plate(China)	12世紀後半	1	福岡市埋蔵文化財センター
38	中国・白磁四耳壺	White porcelain pot(China)	13世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
39	中国・連江窯系青磁碗	Celadon bowl(China)	12世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
40	高麗・青磁皿	Celadon plate(Korai)	11世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
41	高麗・青磁碗	Celadon bowl(Korai)	11世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
42	高麗・青磁蓋	Celadon lid(Korai)	11～12世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
43	高麗・象嵌青磁皿	Celadon plate(Korai)	14世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
44	朝鮮王朝・粉青沙器印花金 海銘皿	Pottery plate(Korea)	15～16世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
45	朝鮮王朝・灰青陶器皿	Pottery plate(Korea)	16世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
46	朝鮮王朝・白磁碗	White porcelain bowl(Korea)	16世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター
47	朝鮮王朝・褐釉陶器片口鉢	Pottery bowl(Korea)	16世紀	1	福岡市埋蔵文化財センター



## イベント一覧

### 第15回 特別展関連公開講演会 〈入場無料〉

日時 7月26日(土) 14:00～16:00

場所 西南学院大学博物館2階講堂

講師／安高 啓明 氏 (本学博物館学芸員)

題目／「海路－海港都市の発展とキリスト教受容のかたち－」

講師／渡辺 一雄 氏 (梅光学院大学文学部長・博物館長)

題目／「海峡・港町の2000年－文化遺産でたどる下関(赤間関)の歴史」

日時 10月18日(土) 14:30～16:00

場所 梅光学院大学図書館ホール

講師／安高 啓明 氏 (本学博物館学芸員)

題目／「九州・山口におけるキリスト教史」

### ミュージアムセッションI「持続する“連携”のあり方」

日時 7月5日(土) 14:00～16:00

場所 西南学院大学博物館2階講堂

【1部】事例紹介 司 会／内島 美奈子 (本学学芸研究員)

講師／安高 啓明 氏 (本学博物館学芸員)

松本 博幸 氏 (天草市観光文化課文化振興係学芸員)

佐藤 睦子 氏 (梅光学院大学博物館学芸員) 梶谷 東輝 氏 (船の科学館学芸員)

【2部】総合討論 総合司会／安高 啓明 (本学博物館学芸員)

### せいなんこどもワークショップ2014「わたしたちのせいなんミュージアム」

日時 8月2日(土) 10:00～12:00

場所 西南学院大学博物館

### せいなんおでかけワークショップ「ポルトガル船・地球儀を作ろう」

日時 8月5日(火) 14:00～16:00

場所 南島原市西有家図書館

日時 8月6日(水) 10:00～12:00、14:00～16:00

場所 南島原市原城図書館、南島原市有家図書館

西南学院大学博物館2014年度春季特別展  
大学博物館共同企画Ⅳ

---

## 海 路

—海港都市の発展とキリスト教受容のかたち—

---

編 集 安高啓明 内島美奈子  
編集補助 山尾彩香 出口智佳子 下園知弥 阿部大地  
資料解説 中尾祐太  
英文翻訳 マルセル・ブリス 山尾彩香 出口智佳子  
下園知弥  
発 行 西南学院大学博物館  
〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号  
TEL 092-823-4785  
発 行 日 2014(平成26)年6月16日  
印 刷 株式会社 インテックス福岡